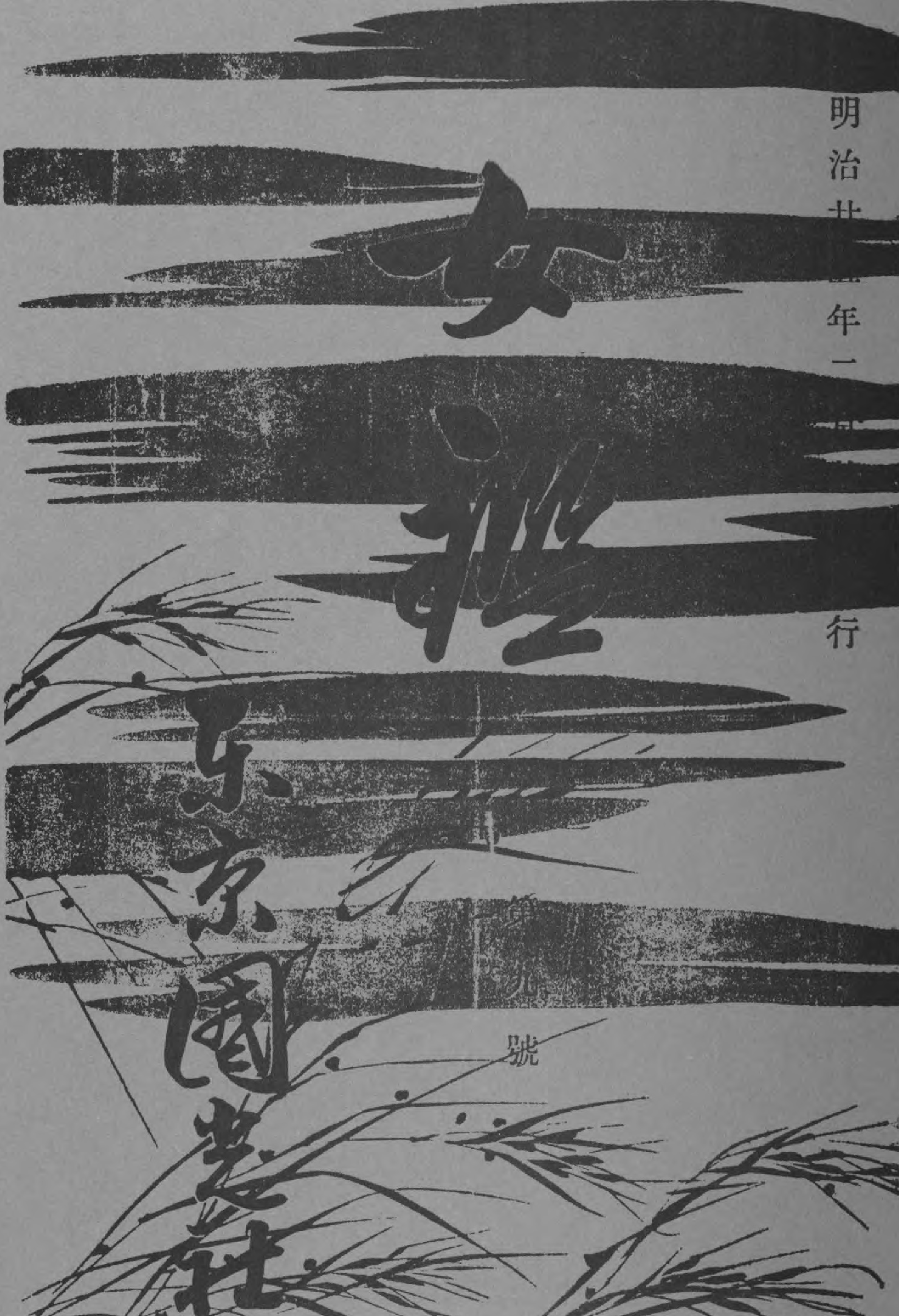


女鑑

明治廿五年一月[illegible]行

第九號

東京國光社

女鑑第九號目次

女鑑

女子教育論（三）

論説

女子の美質…………岩下方平

婦女子に告く…………高島平三郎

史談

天暦の女御宣耀殿の御事…………三木五百枝

松田助八か娘さつ女の事を記す　竹野節雄

家政

育兒小言（八）…………武谷水城

女禮式（承前）…………有住齊

家内衞生（八）…………三笠の舍主人

茶事（承前）…………藤井行麿

學園

和歌のしるべ（承前）…………井口隆太郎

百人一首講義（承前）…………井口隆太郎

漫錄

●檜の舍歌がたり　富田馬太●蘆の下根　忍の舍主人●疏籬草　檜の舍主人●媼物語　井原太郎　●婦行便解　菅の舍

あらひはり…………笠雪子

文林

和歌　●東久世通禧●黒田清綱●岩下方平●師岡正胤●淺野忠●三上一彦●矢上浦三郎●税所敦子●佐々慨水●木村啓●黒田禮子●光岡正彰●花非登羅●獺石學子●獺石文子

和文　●林甕臣

雜報

●在家思想　細川潤次郎君の演説●奇特に見えし少女●開けたる女●天下の美女●雪の朝●廣島婦人會

敎の庭

●歌題　殘雪　數首

●口繪在原業平の妻…………松本楓湖

●挿繪あらひはり…………竹内桂舟

宣耀殿女御芳子



女鑑

女子教育論（三）

女子の天下に於ける職守は、夫に奉事すること一、子を教養すること一なりとは、吾人の意見にして、其のしかあるべき理由はすでに前二論に於て、其の大畧を述べたり。然るに、茲に二の反對説あり。一は男女同權（夫婦同權の意ならん）の辨説にして、一は女子獨立の謬見なり。男女同權と云ふときは、夫に奉事する義なし、女子獨立と云ふときは、子を教養する責なし。此の二説は、之を一國にしては、人種の滅絶を來し、之を一家にしては、人倫の破壞を招く。天下の害是れより大なるはなし。此も亦、前二論に於て、其の大畧を述べたり。故に前二論を

讀みたる世の良妻淑女たちは、夫に奉事し、子を教養することの、我が二大職守なることを知りて、夫の男女同權、女子獨立などゝ云へる僻說謬見には、よも迷はされ給はざるべし。

我れまづ、夫を敬へば、其の人禽獸にあらざるよりは、誰か我れを愛せざらん。常に夫の喜び勇める顏を見て、幼き子らと笑ひ興じ、怒らず爭はずして、此の世をくらしなば、如何に樂しからん。冬の夜もあけやすきを恨み、夏の日もくれやすきをかこつなるべし。我が夫、我が子らに、我がみづから裁ち縫ひせし衣裳をきせて、其の立居するさまを見なば、如何にうれしからん。我が夫、我が子らに、我が手づから、煑たきせし食物をすゝめて、我れも共に打喰ひなは、如何によろこばしからん。冬の夜も寒きを忘れ、夏の日も暑きを忘れ、刀尺薪

炊の勞も、勞とは思はざるべし。春のあした、秋のゆふべには、夫と共に、子らの手を引きて花をたづね、紅葉をめでなば、如何に面白からん。平生の憂苦も、たゞ一日にして消えぬべし。諺にも、笑ふ門には、福來ると云へり。人の幸福にさま〳〵あれども、夫婦子孫相和して、樂みくらすほど、大なる幸福はあらざるべし。

男と生まれては、妻あらんことを思ひ、女と生まれては、夫あらんことを思ふは、人の常情なり。是れ必すしも賤むべきことにあらず。天下の人みな、男と生まれては、妻あらんことを嫌ひ、女と生まれては、夫あらんことを嫌はゞ、此の世も如何に變りはてなん。草木のみ高く生ひしげり、禽獸のみ遠くたけり狂ふに至るべし。男女の形は、もと獨立すべきものにあらず。たゞ、禮を以て

相合ふべきのみ。禮を以て相合ふさへ嫌ひて、互に獨立せんとするは、之を一二法外の人に期すべし。之を天下一般の人に責むべからず。一二法外の人とは、血氣まさに盛んなるに至りては、桃の夭々なるを見て、春を懷ふことなからんや。人の不幸にさま〱あれども、年壯にして匹なきより大なるはなかるべし。春日花を看ても、其の美を說くに人なく、秋夜月を眺めても、其の明を談ずるに伴なく、鬱として一室に入れども、青燈影くらうして迎ふる者なし。あながちに、書を把りて讀めば、あやにくに關雎の章をひらき、頭を擧げて壁を見れば、又た〱、戀歌の短册あり。故に此の如き人は、濫れて婬奔野合の徒とならざれば、激して捨身出家の類とならざる者すくなし。

夫婦は、つひに同權なるべからず。女子は、もと獨立すべきものにあらず。然

るに、一時男女同權、女子獨立の說、世にもてはやされしより、今日に至るまで、みだりに高尙なる學科をさづくるを以て、教育の目的となせるが如し。思ふに、女子をして、獨立の生活を營ましめ、男子と並び立ちて、同權ならしめんには、又、男子の如く、深遂なる學理に通じ、精微なる藝術に達せしめざるべからず。此男女同權、女子獨立の僻說謬見より出たる、今日の教育のみだりに、高尙なる學科をさづくる所以ならんか。然れども、高尙なる學科は、一日二日の能く學び得べきにあらず。男子の身といへども、なほ幼より老に至るまで、勤め學びて成業せざる者あり。況して、女子の身に於てをや。光陰は矢の如し。今日花開けば明日散り。今夜月圓なれば、明夜缺く。女子の學問する時は、能く幾何ぞ、僅に十七八歲に至れば、もはや他人の家に行きて、夫につかへ、子を育

てざるべからず。今六歳小學に入るより、十七八歳に至るまで、學問するとするも、やうやく十二三年の間なり。十二三年の間に、いろはのいの字より、高尙なる學科までを習はんとするは、三面六臂の鬼神も、其のかたきを笑ふべし。故に今日の女子には、半生半熟の學問をなし、夫に事へては、内助の功を奏するに足らず。子を育てゝは、慈母の責を塞ぐに足らざる者多し。世の教育者たる者こゝに、戒むる所なかるべけんや

論說

女子の美質

岩平方平

奏琴して以て思を述べ、吹笛して以て情を通はし、風姿を容色して媚を求め、

言語を婉曲にして艶を衒ふ、各種の遊藝、各種の修飾、本是れ、婦人天性の美質にあらざるなり、高尙なる道德を有せざる婦人にして、奏琴吹笛、唯其技を弄するのみに止まらば、則ち已まんのみ、然らざれは、偶以て痴情を誘發することをこれ求むるのみ。元來風姿の嬝娜なる。江顏の婉麗たるは、欺偏の姿、危險の門にして、賞すべきにあらざるなり。試に想へ、絶倫の美人、蓋世の國色と雖、終世其美を保ち、永年其婉を新にすること能はず、日月の積むに從ひ、歲時の重なるに伴ひて、其の美は殺がれ。其の婉は傷はれ。一世佳人の價値を保つこと能はざるなり、斯く言は丶、天下の婉美なるもの、窈窕なるもの或は其れ之を論難すべれど、余が謂ふ所のものは、之を掩滅するにあらずして、容色の美に加ふるに、熟技達藝を以てせは一世の至美、天下の大觀なりと云ふにあり、

然れとも、容色は以て一世に秀て、熟達なる技藝は、他衆をして聳聽せしむるも、一世の至美を專有し、天下の大觀を獨擅したりといふへからず、熟婦女の美質とするところを考察せよ、女德の德とする所は、古今を通して一轍、貴賤を侔うして一軌なるを、中庸の所謂、舟車所至、人力所通、天之所覆、地之所載、日月之所照、霜露之所隊、凡有血氣者、莫不尊親、易の所謂、恒其德吉と、其德とする所、概萬古不易なるのみ、

早起して、薪水を足し、灑掃して、清潔を取り、紡績して、寒暑を凌き、裁縫して、繿縦を整ふるは、本分の天命に安する所にして、內政を處理する所以のものなり、禮曰、女子之道、雞初鳴、着衣盥嗽、先問安于父母、下厨覓柴火、洗鍋鑊、煎烹茶水、以進父母舅姑、又た易に曰く、女正位於內と想ふに一日の計

は寅にあり、早起すれは百事備はる、亦た婦人の名譽とするは、自己の組織する服縞を以てするにあり、何んぞ、無用の遊藝に消光して、有用なる紬織を放棄することあらん、漢の馬皇后は、大后の尊きを以て、猶白練の衣を披る、穆姜は上卿の母を以て、尙麻を緝むことを事とす、詩の葛覃卷耳は、后妃の紡績を親らするを詠するなり、采蘋采蘩は、夫人の恭儉を述ふるなり、豳風七月の篇は、大家の貴女と雖、親ら農桑の事をなすを云ふ、羅馬のヲーガスタス皇帝は、其の衣服、皇后皇女の手になりしものにあらされは、之を用ゐさりしと、現今、女子を敎育する道、備はるが如しと雖、其の實際を考察すれは、大に然る能はさるもの存するあり、詳かに、慈母の女子を敎養するを見よ。女子をして庖厨の勤めに與らしめすして、慈母之に代るは、未婚に先つて手足の胼胝す

るを恐るゝなり、灑掃沸拭の勞に服せしめさるは、結髻の被塵を厭ふか爲めなり。加之其の衣服を絹帛にし、其の色を紅紛にするは、媚を呈し、婉を求むる、消光的の成育に異ならす、謬れるも亦甚しと云ふへし、内に慣る所のもの既に此の如し、出てゝ校に登らんか、其の學ふ所ハ、廣くして且つ多し、甲孃の綾羅を羨んて、乙孃の綿繡を望む、宜なる哉、其の儉するを忘れて、己の模稜を衒ひ、服の稱はさるは、身の齋たるを肯かはすして、嬋娟を蛾眉春黛に爭ふ、與其奢也寧儉せよと云ふものは、全く其の風習に衝突するものと云ふへし、嗚呼、世の婦女子よ、女子の守て謬らす、行ひて悖らさるものは、無用の遊藝を廢して、實用の紡績を學ふにあり、欺偏の裝飾を棄てゝ、心操の練磨を取るにあり、況んや、技藝の巧、風姿の容は、本來の美質にあらす、其の天命にあ

らざるなり、思へ婦女子よ、其の家政を健全にし、その義務を完うせしむるものハ、夫れ彼にあらして、此れに存することを、

女子に告ぐ

高島平三郎

女子には、大豪傑なし、女子には、大學者なし、然れども、其の大豪傑、大學者を造り出したるもの、多くは女子なり、學者の夙にいへるが如く、女子は其の自心共に男子とは、發達の赴きを異にせるが故に女子にして、徒に男子のなす業をなし、男子の功を奪ひて自己の功となさんとするは、實に無益の勞なるを免れざるべし、

男子はなす能はずして、女子は之を能くし、しかも、此の事は人生最貴の事業

たるを知らば、女子たるもの、此の方向を撰びて、己の務を學ぶこと、豈利ならずや、是即育兒の務なり、

大豪傑は男子に多からん、大學者は、男子に多からん、然れども、大豪傑も、大學者も、一たびは母の懷中に在りて、種々の感化を、冥々の中に受けたる人なり、是等大豪傑、大學者が行へる大功業の萠芽は、慥に母の蒔き育て芸りし結果なり、されば、國家の元氣は、母たる人の心意中より溢る、泉なりとこそいふべけれ、女子はか、る名譽と大責任とをたもつものなるに、あたら身を輕しめ、德に背き、行を亂すものあるは、慨きてもなほ餘りありといふべし、

余は、今自ら省みれば、余が志想、性行、殆ど母の感化に基き、父の敎訓に成れるもの多きを知るなり、余が幼少の頃は、明治維新の後程遠からねば、小

兒までも殺伐の氣を帶び、竹木の片もて打ち爭ふことさへしば〳〵なりき、此際、余若し負けて泣きかへることあれば、其の度毎に余が母は、いたく余の卑怯を笑ひ、泣きて逃げかへる程なれば、始より人と爭はざることよけれ、武士の家に生れたらん者は、いつか戰場に出で、君の御馬前に立たざる可らず、かゝる時に、泣き叫びて逃げかへらるべきやといはれければ、後に余は、他へかたき事ありとも、決して泣きつゝ家にのがれかへる如きことはなさゞるやうになれり、こは、余が六七歳の時に感じたる事なるが、今日に至るまで、明に心中に記して忘れざるなり、

此の例は、育兒のよき例なりといふにはあらず、只母の言の深く心に感ずる、一證として擧げたるのみ、

今の女子たらん人、兒を舉ぐるに至らば、常に君と、國とを忘れぬやう、一言、一行、皆、君の爲、國の爲に歸すべきことを示すべきなり、されば、余が母の言の、余が心中に殘れるが如く、忠愛の志想は、其の兒の心中に殘るべし、

余が友に、今年七歳になれる男兒を持てるものあり、此の兒活潑にして鋭氣あり、其の母、兒は生長して何になるかと問へば、必ず陸軍大將と答ふ、余は、此の母の教への能く此の兒をして、か丶る勇壯にして、愛すべきものたらしめしを知る、然れども、余は、前の問に一歩を進めて、兒は大將となりて何をなすかと問ひ、天皇陛下に、忠を盡し奉ると答へしめんことを望むものなり、

小兒の心百までといへる諺は、よく眞理を言ひ表はしたる言なり、母たる人、常に忠君愛國の情を小兒の心中に注ぎなば、例令、此の事其の當時には、小兒自

ら知らずとも、年と共に次第〳〵に生長發達して、百歳遂に拔く可らざる、堅確なる忠魂となり、義膽となるべきなり、善事已に然り、惡事豈に然らざらや、此の兒は、猶幼少なれば覺るまじとて、嚴肅ならざる言行を、小兒の前になさば、小兒は、いつか其の意義を覺りて、遂に又、拔く可らざる言行を形成するに至るべし、

女子の勢力や、亦大なる哉、女子は、國家の元氣を打ちて丸となし、之れを己の掌中に把握せるものなりといふも可なり、女子たる者、かゝる重大なる勢力の己に在ることを知らば、其の國家に對する責任の、如何に大なるかをも亦知るべきなり、されば、女子の學問するは、教師となる人の學問するが如く、國家の爲めに、人を養成する目的を以て學問するなり、嚴密に言はゞ、人を養成す

るに、必要ならざるものは學ばずして可なりといふべし、借問す、世の所謂、男女同權的女學生れ、能く是等の責任を全うする覺悟準備はありや、英語の流暢れ、以て此の任務を盡すに足らざるべし、駃舌的音樂の巧妙は、以て此の任務を盡すに足らざるべし、壯士的鉄面の饒舌は、以て此の任務を盡すに足らざるべし、一巻のバイブルマリヤと聖靈の何たるを知れりとて、以て此の任務を盡すに足らざるべし、さりとて、香、茶、花を弄し、琴、三絃を玩びて、此の重大なる任務を盡す可らず、無學文盲、僅に女大學を諳誦して、此の重大なる任務を盡す可らず、然らば如何して此の重大なる任務を盡すべきか、余は、玆に之を斷言することを欲せず、只、此の文を讀まん女子の、余が上來述べ來れる所を以て、自ら省み、自ら決定することあらんことを望むものなり、

史談

天暦の女御宣耀殿の御事

三木五百枝

村上天皇の御時、宣耀殿の女御と申すぞおはしける。御名を芳子と申して左大臣藤原師尹の女なりき。この女御、いまだ内裏に參り給はざりしほど、父の大臣常にをしへ給ひけるやう、今の世女の學ぶべきこと少きにあらず。されど、そこは第一に、文字をうるはしく書かむとこゝろざし給へ。さて、その次には、七絃の琴を習ひて人よりも妙なる調を奏でむと思ひ給へ。また、古今集二十卷の歌をみなそらに覺給へ。この三の條をなむ、その學問となし給へとをしへおきてられぬ。

かくて、女御となり給ひし後、天皇かねて右の事どもを傳へ聞かせ給へりければ、御物忌なりける日、密に古今を持ちて女御の御許へ渡らせ給ひ、試みむとぞ思召しける。女御はかくとも知らせ給はず。たゞ、例ならず几帳をひきたて給ふを怪しとおぼされぬ。天皇、やがて草紙をひきあけ給ひて、その年その月何のをりその人の

よみたる歌はいかにかあると問はせ給ひぬ。女御、さては問ひ試み給ふなりけり。その歌はかゝりと心得給ふもうれしく思されけめど、もしひが覺したる、はた、忘れたるなどあらば、いかゞはせむ、と安からず思さるゝかたもおはしけむかし。されど、一つ二つ試み給ひしに違はざりければ、天皇歌の道に暗からぬ女房、二人三人召し出し給ひて、碁石取り出し、女御の答へ給へる歌の數にあはせておかせさせ給ひけり。なほ、打ち續きて問はせ給ふに、露ばかりも取り違へ給ふことなし。かゝれど、天皇はいかで明かならぬ條を見つけてましものを、と問ひに問ひ給ふほどに、いつしか十卷にもなりにたり。かくては、この集の終まで尋ねたりとも、難つくべき樣やなからむとて、そこに標して、寢ね給ひぬ。かゝれど、なほ、御心にかゝればにや、程へて起させ給ひて、ともかくもはてしつけずは安からず。もし明日にもならば、他の本を見合せて下の卷々を復習もやすべからむ、今宵の中にこそ、と燈近くかゝげて、夜の更けゆくまでも尋ね給へれど、つひにことなることなかりけり。天皇還御の後、この事を師尹の大臣に告げ知らせし人々ありければ、こゝかしこの神佛に祈りて、なほ、女御の過なからむことをねぎ給へりといふ。かゝれば、こ

の事は天皇のいたく感じ給ひしのみならず、後々まで后宮の人々、かたり傳へて美談としたりけり。すべて、この女御はいと情ぶかく在して、親族家族はさらにもいはず。召使はれし女房等をも、いつくしみめぐみ給ひければ、かくれ給ひし時は、遠き國々の人までも嘆き悲しみぬとぞ。容貌も、また、いとうるはしく、髮ことに細く長くて、內裏に參り給はむとて車に乘らるゝに、御身は車の上にありても、御髮の末は母屋の柱のあたりにぞひきたりし。また、その髮の一筋を檀紙の上に載せおくも、黑き筋の見えざりしほどなりき、とぞいひ傳へたりける。

この頃の世のありさまは、なべて優にやさしきことをのみ、男も女もよしと思へりけり。さるからに、たゞ藝能をいみじきものと思ひて、そのまことの用にかなふとかなはざるとは、次とぞしたりける。いまこの大臣のをしへをおもふに、また、その傾き無きにしもあらず。されど、そはこの頃のをしなべての習慣なる上、貴人の上にしあれば、咎むべきことにはあらざるべし。さていまは、世の狀態かはりたれば、そのをしへまた、同じからず。さるを、こゝに載せたるはいかにといふに、たゞよく父のをしへを守りて怠らざりし女御の行をめでたしと思ひてなり。をしへの

ごと勤まれしによりて、人々を感せしめ給ひしをよき例と思ひてなり、一言添へまほしくてかくなむ。

松田助八の娘さつ女の事（承前）

竹野節雄

かくて、詮議も殘りなうすみぬれば、周防の守、役人ともに仰せて、澤野か弟、落合某に申渡さしめけるやう、澤野事、重き役義をつとめなから、不道の行ひありて、道か下女、さつに殺害せられたるは、さるべきことにて、そのが身より出たるさびあれは誰をか恨むへき、まして、さつは主人の敵を討たるなり、いさゝかの意趣をも殘すべきにあらず、さるから、そのよし口上書に認めて、印形すべし、又、澤野の諸道具は、闕所申付るなりしと、いとおごそかにいひ渡さしめけれは、親族ども皆その理に服せり、さて、道の親、岡本佐五右衛門に、汝か娘道、局澤野に恥辱を受て、武士の女の一分立ちがたしとて、遂に自害し果ぬるは、けなげなるしかたなりと、主人もほと〳〵感し入られぬ、みちか諸道具は、殘らす引きとるべし、又、骸は是より菩提所に送りつかはすへければ、跡懇に吊ふべしと申聞かせぬ、さて又、

さつか親、松田助八には、其の方の女さつ事、主人自害の上は、當の敵捨措きがたしと、その自害に用ゐし短刀もて、澤野を殺害せしこと、證據明白なり、女の身をもて、をゝしくも大事を遂げたること、神妙の至りなりと、澤野か親族どもよりさし出したる口上書を渡しけり、かく萬の處置ことゞくはてゝ後、堀次郎大夫は、助八親子を私宅に招きていふ、主人周防の守、息女の忠節を感稱して所存ありとの事なれば、近々に此の方より御左右申すべし、それ迄は、家にありて御諚のほどをまるたべし」といへり、助八親子、厚く禮を述へて皈りにけり、その翌日、おみちか親の岡本佐五右衛門は、助八を訪ね來て、みなのものへ厚く禮をのべていへるは、「娘道事ふつゝかながらも、親の名汚さじとの誠心より、自殺を遂けたりしか、息女の忠節にて、その汚名は立に雪ぎ侍りしのみか、その死も犬死とならざりけり、思へは禮をまをすに言葉なし、この上は息女さつどのを拙者に賜はるべし、娘かため萬に一だにも報いなん、妻も一向懸望し侍る」になどいふ、こを聞きてさつは更なり、助八夫婦もその厚意に袂を濡しけり、やがて、助八いふ御志のほどいとかたじけなけれど、殿の内意も侍れは、今はかくと御答いたしがたし、その内意伺ひ得

てのち、ともかくも爲し侍らんとぞいひける、かくて、四月七日といふ日に、堀次郎大夫助八を呼ひ出てゝ、同役森井甚右衛門、奥目付小池利吉衛門、對坐にて申けるやう、息女さつを中老にめさる、速に御請いたすべしといへば、助八をぢなき娘、大役の勤はいと心もとなし、さるべき人を召させられてこそと辭みしか、ゆるさるべうあらざる故、漸やく御受をそなしにける、やがて、切米四十俵に、五人扶持、引越料として金百両、時服五ツ賜ふよしの目録渡さる、助八辱なさ身にあまりて泣ともに皈りけり、佐五右衛門夫婦もこの趣きをきゝて、いと悦ひぬ、さて、直にさつを養女に貰ひ受けて三五郎おみやにも、兄弟の盃させけり、さつはその後、屋敷に引移りて名を松尾と呼はれ、忠貞の名高かりしか、後廿七歳の夏、神尾某に嫁して子あまた設け、龜鶴の齢をたもちて、心安く世をおくりしとなん、

家政

育兒小言（八）（承前）

武谷水城

是れまで述しは特に心の上に關する事柄なりしが、体格の上にても亦異る事無し、總して人の生活し、又成長するは心と力との二のものゝ働きに依る事にて、兩者いづれを偏重すべからずとは雖、人の心の靈妙なる機能も、畢竟は力と云ものゝ有て、養ひと爲さゞれば、其靈妙の働きも亦滯るものにて、物に譬へて云ば、心は燈火の如く、力は油の如く、又心は琴の音の如く、力は琴の弦の如きものにて、油盡る時は火獨り明なる事能はず、琴の弦の弛張に依りて、其音の高低を生ずると等敷、人の体力の養育方を怠りて、獨り心の働きの十分ならん事を望むも、其無理なる事、猶油を點せずして、燈火の明かならん事を望み、弛みたる琴の弦を彈きて、高き音調を興さしめんと爲すに齊敷、到底出來難き望みと知るべし、是れを健康の心は健康の身に宿ると云、されば体力充分ならざれば、何事も心に任する事難くして、思ふ事成らぬのみならず、身弱く心のみ鋭き時は、却て早晩精神の病氣を引興すものなり、此故に小兒の体育を十分に爲す事は、亦育兒の法の根原にして、其大切なる事、更に精神の仕附け方に劣らぬ、一大事と知るべし、此大役も亦實に母の責任なり、尤人の身の强弱健不健は、父母又は祖父母等の遺傳に依る事とは雖、其過半は亦母の

妊娠中の身の保ち方、生れて後の養育の方如何に依る事にて、畢竟人の身の健全なるは、分娩の安全なるに依り、分娩の安全なるは、婦人が妊娠中身の養生方の行届きて、其身の健康なるに因る事なり、

總じて世の中の人事は、何事にても、肉体に關するものと、精神則心に關するものとの二ッありて、其管理者多くは同じからす、例之は、國家の上にても、肉体の事は主に政治の主る處にて、精神の事は宗教又ハ其外の道德上の敎の宰る處にて、兩者の管理自ら別あるもの也、然るに、人の幼き時計りは、胎内にては、申迄も無く、此世に生れ出てゝ後も、十數年の間は、母の心得仕付け次第にて、精神も自ら正く、身体も健かに為り、又は精神も曲み、身体も弱くなるものにて、肉体精神兩つながら、母の手加減一ッにありて、則母は子に對しては、政治道德兩樣の全權を兩手に握るもの也、是れ人を製造する事は、殆と天下の婦人の、共有したる全權なる所以にして、此點に於ては、婦人が冥々の裏の權力、實に比類なく、婦人は國の母、又は第二の造物主などの、尊稱を受る根元と知るべし、母少し斗りの麻酔藥、又は下劑を服すれば、乳兒先づ眠を催し又下痢す、母妊娠中油濃きものなどを多食して、身

の養生を怠る時は、其子生れて後胎毒深きにても、肉体上の關係の一班を知りぬべし、此の生時小兒の体質の强弱健否は、其子一生涯の体格の根元と爲る事、心の作用と異る事無し、

母の子に對する責任の至貴至重なる事此の如し、已れの子とは言へ、母は如何の心得にて之れに對し、又夫に對し、家に對し、國に對して、此の育兒の大任を全うする事を得べきか、賢明なる婦人方は自然に經驗も少からぬ事なるべし、今二三の書と一二の所見とに依り、次に其大概を述ぶべし、

（つゞく）

女禮式

有住齊

一同輩に盃指し樣付受け樣

互に出座して、盃三方を取扱ふもの也、盃をさす時は、下を捨て、右左と露をきり、三方に載せ、取り直し、三方の腰の中程に、兩手を掛けて、少し進むるあり、盃を受る時は、三方の腰の中程に、手を掛けて引よせ、右手にて盃をとり、左手に移し、右手にて三方を少し腰に寄せ、右手を添へて、胸の通り迄、盃を持上げ、

頭を少し低れて、禮をすべし、其時盃を指したる人、一禮するなり、酒を受るゝ酌人の來りたる方の、片手に盃を持て受るものなり、

一下輩に盃さし樣付受け樣

下輩には、盃の下を捨るのみ、露をきるに及ばず、臺にのせ、下輩の方に向け直し、兩手にて縁を持ち進むべし、倘輕きは、片手にて推し出すべし、又貴人盃を三方に置たる時酌人直に三方を取て、下輩の前に持行く事もあり、是は至極下輩へのあつかひなり、

下輩の盃を受る時は、臺を引よせ、右手にとり左手に移し、右手を添へ、倘輕きは、片手にて目通りまで持上げ、うなづくのみ、至極の下輩ならば、盃をとり、直に酒を受て苦しからず、

一肴挾み樣

貴人には、肴を挾めよとの言なきに、挾み進らするは無禮ゆゑ、先づ臺にて進むるものなり、挾めよとあらば臺を引出し、側に寄せて、左手を突き、右手にて箸を下より取りて、左手をそへて持直し、肴を挾み少し進み出て、左手を肘にそへ

箸先をあげて進らせ、少し引て、箸を持ながら一禮するなり、同輩に肴を挾みて出す時は箸先を横にして、左手を腕にそへ出すなり、下輩には箸先を下になし、片手にて出すべし、

一同受け樣

貴人より肴を給はるときは、進み出て、右手に左手を添へ、肴を手の内に受け、大指にて押へ跡へ下り、両手にていたゞき、立ざまに、懷紙の間へ入るべし、同輩より挾む肴は、右手に左手をそへ、指中に受け、左手を右手に重ね、胸の通りまで上げ、禮をすべし、下輩の肴は、右の片手にて指先にうけ、輕く禮をすべし

一銚子提子拔き酌取り樣

年始、諸祝儀等、長柄提子の酌は、拔き酌にするなり、本酌（長柄を持出るものなり）銚子を横にして、右手にて菊の金の所（長柄の上の繼目に打たる、丸き鋲を云）を下より持ち（親指は、上より鋲の頭を持つべし）左手は猫足（長柄の末を折り曲げたる疊摺の所を云）を下より持ちて出て、先づ下座に着くべし、此時長柄は、膝の前に横に置き、左手ばかり左膝の脇に突くなり、加への者は、提子の

口を向にして左手にてつるを下より持ち、左手を提子の下に入れて受け、本酌の跡につゞき出て、下座に扣ふべし、此時提子の口を向ふにして、膝の前に置き、左手ばかり、左脇につくべし、時宜を見合せ、本酌貴人の前に出て、酒をつぎて起つ時は、いつも上座の方に向ひて起つべし、酒を加ふる時は、下座に下り盃のある方に座す、其時加の者起ち出て、本酌に對座し、提子の酒を銚子に入る、加へ終り本酌上座の方に向ひ起ちたる後、加の者は、下座の方に向ひて起ち、本座につくべし三々九度、五獻三獻の酌等、惣て此心得なり、

一同結び酌取り様

婚禮の祝盃には三々九度、結酌にすべし、先づ本酌加、並び出て下座に着き（式正には、先づ本酌加床前に進み神酒を銚子に移し、下座へ持下る、作法あり、委敷は次卷婚禮式の條にしるす）軈て本酌聟の前に進み、酒をつぎて、下座の方に向ひ加に起ち、下座に下り聟の方へ座す、其時加の者進み出て、嫁の方に座し、向ひ合ひ、酒を加へ終て本酌起ちて、向ふの方に進み出て、加の者は側を過る程に行き廻り、聟の方に進むべし、其時加の者起ちて、向ふの方に歩み出て、本酌

の座したる跡を廻り、本の座に着くなり、本酌嫁の前に進み、酒をつぎて、起つ時は上座の方に向ひて立つべし、聟嫁の座配により、初め右の方に向ひ起ちたらば、終りまで右に向ひ、初め左に向ひ立ちたらば、終りまで左に向きて立つべし、惣て本酌加とも、いつもあとへ戻らぬ様に立廻るなり盃納り、末座大結と云ふは、本酌加勝手に入る時、本酌は眞中を通る、其時加の者迎に出て、本酌に行向ひ、嫁の座の方に添ひて廻り、一同に入る事なり、聟入舅入等の祝盃も、式正は結酌にすることあり、

一同別れ酌取り様

嫁里出の時、父母、親族の祝盃は、別酌にすべし、本酌加の作法、披酌の如くにして、酒を加て、本酌加起ち上る時、双方一同に立別るゝ様にするなり、

一小流れ酌取り様

年始、諸祝儀の節、流れと云ひて、貴人の盃を、一同に賜はる事あり、先づ數の盃を出し、酌人出て、貴人に一獻つぎたる酒の餘りを、數の盃に少しづゝ移し、内一つを取て、銚子の渡り（長柄の先き、銚子の眞中に、渡りたる細き所を云な

り）に載せ、下座に下り、扣へ居る時、一人づゝ出て、一拜して盃を取り、謹みて戴き、控酒を受け、呑畢て、又一禮し、盃を持て立つなり、人品により、肴を賜はる事もあり、

一大流れ酌取り樣

貴人の前に盃一つ出し、下座に數の盃を出し置きて、酌人出て、貴人に一獻つぎ、飮まれたる酒の餘りを銚子に入れ、下座に下り控へ居る時、受る者一人づゝ出て、一拜して盃を取り、酒を受けて後ち、謹ていたゞき、飮み畢りて、一禮して盃を持て立つなり、是は前の小流れよりは、輕き輩に賜はる作法なり、

一瓶子酌取り樣

右手に中程を持ち、左手に底をすゑて持出て、酒をつぐ時、左手を突き進み出て、口を向ふにしてつぐべし、後世燗鍋を用うれども、昔は錫を專ら用ゐし事なり、但し口に蓋あらば、左手にてとり、瓶子の口の下、右手の指先邊にあてゝ、つぐべし、

一燗鍋酌取り樣

口を向ふにして、右手にてつるを持ち、左手に底を据ゑて、持出て、酒をつぐ時、左手を突き進み出て、口を向ふにしてつぐべし、

家内衛生(八)

三笠舍主人

食物の續き

牛乳、消化易く、滋養の効最も多きものにて、世に用ゐる事も亦廣し、支那及中央亞細亞の諸國、又歐米の國人は云に及ばず、我邦にても、古くより用ゐし事は、孝德天皇の御代に、牛乳を奉るものありしかば、天皇飲御ましまして、大に愛させ給ひ、其人に和藥使主の姓を賜ふ、とあるにても見つべし、(姓氏錄に出)其主なる性分は、蛋白質、脂肪、糖分、鹽分、及乾酪素と名るもの、其外二三のものを含み、血液の性分に甚近きもの也、故に其滋養の力の大なる事、人乳の代用と爲して、小兒の成長爲すにても知るべし、胃弱の人、心臟の病ある人、其外總て病人の食用に宜し、特に熱病の後衰弱爲したる人にて、滋養を要するも、牛肉鷄肉抔口には旨きを覺ゆるも、却て胃腸を傷ひ易きもの抔には、無二の貴品也、又心臟病ある人は動

悕を減し、又胃腸の通利をも克くす、
良き牛乳は純白にして濃く、四時乃至八時間放置すれは、凝乳とて凝固したるもの表面に浮ふ、水の重を千と立れば、牛乳は之より重き事、千二十六乃至千三十五の間にあり、奸商水を混して販ぐ事有、然る時は稀薄にして上に述たる異重輕く爲る、又米泔汁、若くは粥汁などを加へて、量を増す事あり、是を識別するには「ヨジウム」一滴を落す時は、忽ち緑色を顯はすも、良乳は此顯象を呈せず、又煮る時は塊を生ず、此等の奸策は屢ある事なり、連用する時は折節試るを良とす、又始めて注文なしたる時も試撿爲すべし、

總て牛乳は用ゐる前に、一回凡そ三十分間計、一百度位の熱にて温めて後に用ゐるべし、又温めて暫く置くにも必ず、空氣に觸れしめず、用ゐるまでは密閉爲すべし、

近來牛乳より病氣の傳染する説あり、是れは人の乳は、母の乳房より直に吸取り、其間に有害のものゝ觸るゝ暇無きも、牛乳は搾り取りて、飲料と爲るまでには時間を經、且色々人も取扱ひ、又色々の器にも入るゝが故に、空中に浮游する様々のものを混し、或は人又は器物杯より、傳染病の毒素を混じて、害を爲す事有、歐羅巴

の統計に據れば、牛乳にて成育する小兒は、人乳にて生育する小兒よりも、死亡の數多く、其死亡は腸胃の病多し、是は西洋の國々にて、中以下の人民は子を他人に預けて、母も稼ぎに出るもの少からず、預りたる人牛乳にて其預り子を養ふ事にて、固より衛生上抔の注意少き事故に、混じもの抔あり、又其用法も妄りにて、斯る結果あるものと見ゆ、用ゐるに臨て煮る時は、此等の害寡かるべし、

搾取りて後の害は、右の法にて防ぐを得べきも、病牛の乳は此の如くする事難し、され共牛病に罹る時は、乳の分泌多くは止むもの也、故に病牛の乳を用る事は、至て稀也、されども結核病の毒素の如きは、乳汁中にある事ありと雖、幸に結核の毒を傳染するは、主に人の呼吸よりするものにて、食物より胃に入るも、其力を逞うする事能はずと云、兎に角此一事は未だ疑團の中にあれ共、幸ひに東京にては、結核に罹りたる牛の乳は、搾取て販賣する事を禁止しあれは、牛乳の爲に結核を傳染する恐無しといふべし、されば此外の害は前の二法(煮ると密閉)に依りて十分に防を得べし、故に此二法を充分に行ひ、奸商が故意に混じたる物質の有無を、時々試撿爲せば、更に顧慮するもの無るべし、

牛乳を貯畜爲すには、一回沸騰せしめ、壜中に入れて密閉し、其の周圍より華氏二百五十度の熱にて温め置く時は、長時貯ふるも障無し、又時に煮て、少量の重炭酸曹達、又は少量の水揚酸と砂糖とを混じ置時は、二週間を保得べし、又單に水揚酸、又は硼酸少量を加へ置くも可也、いづれも密閉し、用に臨て鑵共に温むべし、此等の法は船中又は旅中杯の時、携帶に必要也、

牛乳の外羊乳、驢乳、又馬乳も用ゐるべし、其功力は皆牛乳に劣る、牛乳に事缺ざる以上は、特更に用ゐる必要なし、

酪、牛乳より精製したるものにて、多くの脂肪を含む、蒸餅に着けて食ふ、過食すれば胃に滯り易し、我邦にても中古牛酪を製して用ゐし事、延喜式などに見ゆ、

茶事（承前）

藤井行麿

此外節序曲尺といふ事あり、節序は茶人常鑷の數奇者、一月元三より歳暮除夜に至るまで、ことにふれ、時によりて、催すをいふ、舊暦のころは、五節句など、飾とりぐ〳〵にしたるなり

○曲尺は所謂建築にて、利休、遠州其の外茶人このみの家作は、菴室のみならず、座鋪、書院、大廣間、勝手まわり、庖厨にいたるまで、つり合恰好、曲尺のわり出しありて、これを眞草行の三つにとりわけ、かたき所には、また和らかなる木材などもちゐ、造立すれバ、おのづから風韵見えておもしろし、近世俗屋をつくるにも、其まねして氣どれども、曲尺たがひ恰好よからねば似て非なるこゝちしてしれる人の眼にはおもしろからず、あたら木しなを寸尺わろく仕立ておしきものとおもふべし、其道得たる人にばかりて、曲尺を定め土木せば、つり合恰好位置とゝのひておもしろき造作も出來なんかし○庭つくりこれも茶人の築には、役石の据かた曲尺より出て規則あり、見て來たにてつくりたるは何とやらんおちつかぬものなり、後世茶人の基範として稱擧するは、西京桂御所の御別業の御庭なり、小堀遠州、一世の工夫を凝し時日をかさね力を盡し造られたる御庭なり、古書院、瓜畑御茶屋、月波樓、松琴亭、賞花亭、御輿寄、眞飛石、桝形、袖形等の手水鉢、八ッ窓御圍、まへの流手水、また白川石四間余の石橋、其外、諸國の名石、ものふり錆たる樹木、老しげりたるはえもいはれぬ風景なり、又泉州堺南宗寺境内に近來引うつしたる利休の草

庵、在世の姿その儘に据たるつくばいつたひ石など、苔むせるもおもしろし、

利休庭の道歌に

つくろはぬ草木を庭の姿にてやどめづらしき山のおくかなといへるあり、

おく意はかゝるところなるべし

敷松葉並砂雪隠

○しき松葉は、植込の木下見合てすべし、秋つみ入したる時蒸葉し置て、それを口切の茶にしくべし、取除き露地のうちは、大晦日に揚て新年をむかふるに改るよし、廣庭は一月より三月ころまでにおひ〳〵わけ、首夏風呂の前には不殘取除くべし

○砂雪隠は、左右に石を据、その中に砂を入置なり、飾雪隠ともいふ、貴人招迎のために設たるものにて、なみ〳〵の人の行べき便所にはあらず、活木の枝葉も少々つけて、向の石にもたせ入置べし、貴人入て便し玉ふ時は、右の木枝にて砂をかきわけ、まづ紙二枚を落し、便をはりてまた跡より紙二枚を落し、其上に枝木をもちて砂をかけ置玉ふなり、さりながら、此雪隠他人の家にて外にゆくべき便所なき時は、尿ばかりはなみ人も入てすべし

○夜會の花、夜會の茶事には、花を入ぬ事と近世いふ人あれども、昔はしからず、利休も入られたり、しかれども、紫またハ黄色などの、色入ばさはやかに見えぬ花は入ぬぞよき、紅白の椿など瞭然たるは、入てこそ一興あれ、

○眞の手桶これを眞のものとおもふはまちがひなり、眞塗の手をけといふことなり、

○眞炭斗は新瓢子縁高炭臺の三つをいふ、

○釜の稱へ昔七名、魚目、蟹眼、蚯蚓、車聲、遠濤、松風、湧泉、といふ、濡釜よりかけて靜坐して聞ばしらるゝあり、

○茶匙の見ところ七ッ　櫂先、舩底、雉股、露、樋中、採上、切詰、

○七種の蓋置　五徳　蟹　螺榮　三人形　一閑人　隠家　火屋香爐

利休待合に懸たる飯木

佳客期
數相集
聲飯須
報來光

表面の圖

裏面に記載せる挂書

一賓客腰掛來同道相揃者飯擊而可レ報ニ案內一

一手水事專心頭滌以此道之爲ニ肝要一

一菴主出請而可レ入ニ客菴內一庵主貧而茶飯諸具不レ偶無ニ美味露地之趣一不レ得ニ其心一輩者從レ是歸去

一沸湯及ニ松聲一至ニ鐘聲一者客再來湯相火相爲ニ相互一事

一庵內庵外世事之雜談古來禁レ之

一一會始終不レ可レ過ニ二時一　但法話淸談者制外

一賓主歷然之會巧言令色不レ可レ入

右七箇條者茶會之大法也嗜レ茶輩不レ可レ爲ニ忽者也

天正十二年九月上己

厚德軒慶首坐

抛筌齋宗易

○鷺繪源三郎覽書といふものあり、鷺繪は南都の人姓は土門氏、名物松屋肩衝に所持傳來之家なり

源三郎久重いふ、すぎし頃細川三齋侯の御はなしに、利休より花を入候ゆゑ只今御

出を待と、加賀肥前守蒲生飛驒守我等三人へ申來るにつき、三人とも利休宅へ行席入したれども始終はなはなし、所望すべきかと三人いろ〳〵申合しが、みなおそれてつひにえいひ出ず、各いとまごひして歸る時、利休路地へ送來て其時いはれしに、今日は、花を入見せまをさん爲申入たるなり、花を御覽候やといはれしが、見ぬゆゑ座敷のうち路地まで見まはしても見えず、いかなるにやといへは、御尤に候とて塵穴をしへらるゝ、椿のはなの落たるはいかさま見事にてありし、みな目を驚かしたりと御ものがたり有き、

また或時、右三人へ御茶可申とありて行しに、潜り上りの口を明れば、入口に大壺置てあり、座入あらぬに三人ともはたとゆきあたり、いかゞにすべきと、いろ〳〵はなし合ども、床の上に揚べきわけにもならず、これにより席のまん中に壺を直し、座入して先御壺を御床へとまはしたれば、利休機嫌よくして床へあけられたり、客の思案よくできたりと御はなし有たり、

またある時、若き衆利休へいはれしに、今のやうに數寄の見事なることは昔は有まじく、紹鷗の時代とてもさゝかぬことおほく有しならんといへば、利休こたへて、

いづれも心得ぬことを恥をさるゝものかな、面桶引切などにてもよく分別し給ひて、太サ深サなど定められたる寸法に、何ともいふ事は成まじく、沙汰の限りのことを申人々かな、よく心得られ候へと、まをされし事ありし、

寛永十一年戊九月七日江戸西之丸にて御茶客三齋侯七十六歳の時、家光公三十五歳之時、前日將軍家より佐久間將監上使として入來、明日御茶可賜、依之御道具何成共御好候へ御飾可被成との上意なりとあり、三齋侯御請御禮ありて、御道具投頭巾、安國寺虚堂、鶴の一聲、此三種拜見仕度旨懇願、翌日登城、表までの御迎へは、松平伊豆守、將軍御病後故御目代御斷の上意あり、路地うち三齋侯の手引は、土井大炊頭、御席四疊半、臺目御床かけ物、安國寺虚堂、御釜廣口、棚に鶴の一聲の羽、香合炭斗ふくべ、御茶壷はいまだ御取寄不被成候へども急に被爲召、去年の壷其儘有を御口切なり、今日開爐いたさせ候にけふは、時雨空にて寒きゆゑ、至極都合よしと御意ありたり、御水指絹、御本箱、御茶入、投頭巾、御茶碗高麗、古織部好、割高臺建水面桶、ふた置引切御茶杓二尊院花入、鶴の一聲御自身花を被爲入候ところへ、永井信濃守寒木爪を差上たるよし、暫御覽ありて、いや〱三齋は老人なり、

我等は病後なり、木爪ところにてはなし、時節といひかた〳〵仙花にていはひのものなればとて、菊を被爲入たるよし、

御膳

向今焼菊皿に、生貝、細作り松魚掛て　御汁鶴なめすゝき、御焚物、煮逗腐、味噌かけ、山椒、御重二重箱、焼とり、　蒲鉾、八寸、干鱈はそく掻て　御吸物白魚、御菓子、鶉焼、芋、縁高に入て

御勝手の間に古今集定家書　御飾付物種々ありたれども、御茶濟て直に參立て、それをば見ざりしと御物語あり、

京師大佛の小屋場にて、各數寄を出す、ある時天王寺屋宗及より、利休と與一郎君と兩人へ御茶可申となり、其時利休は聚樂は在しゆゑ、與一郎君より、大佛の小屋塲まで前晩に御出あれと仰られければ、一段の事とて泊がけにまゐるべしとありしにつき、しからばとて與一郎君先へ御歸、掃除などして釜掛御待のところ、利休小屋塲へきたる、其儘數寄屋に入御はなしのうち、夜の五つ時分より雪降出し、大に積りければ、時刻をはやめて九つ時分より行んと利休いふ、さては先方の都合い

かゝやと思召、利休にはかくして内々卒度人を御つかひ、宗及に御知せありしに、宗叡すこしも驚かず、時刻をすゝめゆきたるに直ぐに潜りを開て迎込、燈籠の灯火に見ゆる雪の景氣おもしろく、霄から手水柄杓は不置、雪の掃除はよく習の如くにしたり、席入すれば、床に千鳥の香爐盆なしに直おきしたり、床の内、勝手の方に寄推朱の香合あり、座入すみて宗叡香爐をおろしたり、此御し方習あり、さて宗及香を爐く、利休香名はと問はれければ、月にて候と答たり、利休また繼で香を爐く、宗及銘を問に、利休東大寺にて候と答たり、扨香爐床へ御上と利休いはれければ、宗及我等最前おろし候ゆゑ、利休に御上あれといふ、是非に不及とて利休上たり、右すみて爐中に炭をさし點茶す、宗及一世の數寄の出來なりしと歸るさ利休いはれたり、此時與一郎君の乘物に利休をのせ、御自身には乘物の脇にそひ、歩行に御歸なりしと、此時利休云今日は、宗及一世の出來なれども、只一事不出來あり、御心つかれしやといふ、與一郎君こゝろ付ずと仰らるゝに、利休云、月を爐くといふことあしく候月雪は見てこそ賞翫すべけれ、さる事ゆゑ拙者東大寺を爐くと繼たる香と答申候、爐くは即燒にてかなはざる事なり、三齊君乘物を出て利休をのせ、其

乘物に付添途中歩行給へることはたび〳〵の事ありき、宗及手水鉢に水を不入、くぐりのまへに湯桶に湯を入新らしきたらひをそへ出し置たるよし

學園

和歌のしるべ（つゞき）

井口隆太郎

第九助辭

結にならず	結にあらず	一段の結	二段の結	三段の結
第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
ませ	まく	まし	まし	ましか
ず	ず	ず	ぬ	ね
ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ
しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ
せ	せ	す	する	すれ

させ	させ	さす	さする	さすれ
れ	れ	る	るゝ	るれ
られ	られ	らる	らるゝ	らるれ
けら	けり	けり	ける	けれ
な	に	ぬ	ぬる	ぬれ
て	て	つ	つる	つれ
たら	たり	たり	たる	たれ
めら	めり	めり	める	めれ
なら	なり	なり	なる	なれ
べく	べく	べし	べき	べけれ
まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ
ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	ごとけれ
		む	む	め

	此より以下は、變化せざる助辭にして、一段の結となるものを擧ぐ、此れらの助辭の結となる時は、大かた詞の切れる所になりて、希望、感嘆、禁止、疑問、反語、指定等の意味をあらはす時に限る、
けむ らむ き らし	ぞ（ぞや ぞも なぞ） ばや（ばやな） じ ね なむ か（かも） かは や（やも） やは
けむ らむ し らし	
けめ らめ しか らし	

よ	な	が	かな	を
ふ○○そ	ふ○○それ	がも　がふ	がふや	かも

右の圖に擧げたる助辭は、動詞或は體言の下に連りて、其の意味を完全にする者なり、故に、動詞の下にある時は、三段ともに、此助辭にて結ぶなり、

すべて、助辭にて結ぶ時は、動詞の結は關係なし、故に、結は、三段ともに、動詞にて結ふこともあれば、助辭にて結ふこともあるなり、

此の圖も、熟讀諳記して置かざれば、實際運用上にいたりて、まがふ事あり能く能く注意すべきなり

此の和歌のしるべは、是にてあらまし說き終りたれば、此の回かぎりに筆を止む、猶委しき事は、後日機を見て、說明する處あるべし、見ん人諒し給へかし、

百人一首和歌の解（つゞき）

井口隆太郎

謙德公

あはれともいふへき人はおもらえて身のいたつらになりぬへきかな

もう其方の外には、誰も自分を可愛と思つて、嗚呼あなたの樣に、かはいー人はないと、云ひそうなる人は、此の世の中には、迚も有らうとも思はぬから、自分は其方の事ばかり、始終戀しく思つても、はやてがれ死でも、しそうに成りそうになつて來た事であるわい、此の位思つて居る事なれば、少しは自分が心を推察してもらひたいものである、

此の歌は、始のほど、行きかひせし女の、後に此方を見すてゝ、何とも思はぬ樣になつて、再び逢はすなりしより、詠みてやられたる歌なり、

あはれとは、嗚呼と云ふ事にて、愛する心あり、身のいたづらとは、死ぬる事を云ふ、

曾根好忠

ゆらのとをわたるふな人かちをたえゆくへもしらぬ戀のみちかな

あの紀伊の國にある由良の迫門を漕いで渡る船人が、擢を折つて兎も角もしやうがなくなつて、どちらへ行くやら、方角も分からなくなつた通り、自分も思ふ人に云ひよる便が、なくなつてしまつて、まあ此れから先は、如何いふやうなる事にあるやら、さつぱり其の行く先がしられない、戀の道ではあるわい、さて〳〵困つたものである、

此の歌は、上の三句は下のゆくへもしらぬと云ふ事をいはんために、詞を面白く云ひつゝけたる序なり、

惠慶法師

八重むくらしけれるやとのさひしきに人こそ見えぬ秋はきにけり

昔は、まあどの位立派な屋敷で有つたらうけれども、今はこんなに荒れはてゝしまつて幾重も〳〵おし重つて生へて居る草が、無暗矢鱈に茂つて居る、此の屋敷の淋しいのに、主人らしき人は、かげも形も見えないが、秋と云ふ者は奇体なものので、矢張相變らず、こんなさびしい家にでも來て居るわい、

八重むぐらとは、いやが上に生ひしげれる草を云ふ、人こそ見えねとは、主人は見えずと云ふ意なり、

源重之

風をいたみ岩うつなみのおのれのみくだけてものをおもふころかな

風がひどく吹いてきて、海の中にある岩に、浪かあたつて砕くる様に、自分は浪の如く、幾度も〳〵其方の方に云ひよれども、其方は岩の様になつて、ちつとも受けつけぬから、自分は唯ひとりで浪の砕くる様に、胸をくだいて物思をして居る事である、さて〳〵つれない人ではあるわい、

風をいたみ岩うつ浪のの二句は、次の砕けてと云はむ爲の序なり、然れども此は他の歌の序とは、いさゝか違ひて、浪を自分とし、岩を先方とし、浪の幾度打ちよせても岩が受けつけぬを、自分が幾度も〳〵いひかくれども、先方がちつとも受け付けぬに、よそへてよみたるなり、

大中臣能宣朝臣

みかきもり衛士のたくひのよるはもえてひるはきえつゝ物をこそおもへ

天子様の御門を守つて居る、衛門の役人の人の、衛士が毎夜〳〵燒いて居る火は、夜はひどく燃えて、晝になると消えてある、丁度其の通り、自分も夜は思ふ人を戀しく思ふ心が切になつて、胸の中が燃えて焦かるゝ樣にあり、晝になると燃く火の消ゆる樣に、自分の身も消え入りて、死にそうになり〳〵して、心配をして居る事である、

衛士とは火を燃いて番をして居る者を云ふ、

藤原義孝

君がためをしからさりし命さへなかくもかなとおもひけるかな

未だこんなに逢はない内は、其方に逢ふためなら、火でも水でも厭はない、假令どんな事が出來て、命にかゝる樣な事があつても苦しうない、命にかへてでも、是非逢ひたいと思つて、惜しくもなんともなかつた其の命までが、やう〳〵に心をとげ、快よく其方に一度逢つて、歸つて來てからと云ふものは、急に惜しくあつてきて、是から先きいつまでも長生をして、行く末久しく添ひたい者であると思ふ心に、あつて來た事であるわい、

なかくもがなとは、長くありたい者であると、心にこひねがふ事なり、
此の歌は、女のもとへ行き、かへりて後よみておくりたる歌なり、

漫録

楢の舎歌がたり

富田馬太

三好長慶は「連哥に巧なりしなり。或時居城に於て、「薄にまじる葦の一むら」といふ句に、連座つけあぐみて、稍時うつれる頃、河内より早馬して急を告げ來りぬ。長慶羽書を披き見て。くる〳〵と巻きをさめ、左あらぬ体にて「古沼の淺き方より野となりて」と付け合はせ、さて後、阿州なる舍弟實休討死の趣しらせ越したり、今日の連哥これまでなりとて、やがて勢を揃へ出陣せしといふ。

然るにこの事を、宗祇法師の付け合はせのやうにしるせるもの有り。そは宗祇回國の折、某の里に妖屋敷あり、夜な〳〵人靜なるに至れば、あやしき聲して「薄にまじる葦の一むら」と喚ぶよしを聞きて、こは面白きことかな。いでその容子を探り呉んと、人のとゞむるをも耳にせず、その家に行きて潜み居るに、果して更たくる頃、常の如くうたひ出づ、それなめりそれなめりとうちうなづき、「古沼の淺き方より野となりて」と付け合はし

しかば、妖かへつて驚かされけん。それよりは奇怪のこともなくありしとかや。さても不思議のことといふべし。天野信景は、この事を安宅攝津守冬康連哥の席にありて、「古沼の淺き方より野となりて」とある句に「薄にまじる葦の一むら」とつけて後に、會衆にむかい、弟なる者討死仕り候よし只今申來候と靜に披露して、座を立ちて歸りしとかや、その時分さしも優なるふるまいかな、と諸人感じけるとなんといへり。されバその傳説の區々なること明かなり。

古哥の秀句にして、後世の者の感歎のあまり打吟ずるを、古人既よみおけることに心付かずして、その人のならんと誤り信ずること往々有ることなり、かの太田道灌に書きて出だしゝ「七重八重花は咲けども」の句は、古哥なるを乙女の即吟のやうに思ひなせる者あり。松平伊豫守が女或時、野路村雨といふ題にて、「いそがすばぬれもやはする旅人のあとよりはるゝ野路の村雨」とよみしは、近來の名吟なるよしいひはやしゝと雖、これ只古人のと第二句のかはりたるのみなり。近江大津の奈良屋惣右衛門が娘、十四才の時「人ならばうき名やたゝん夜あく〱のわが手枕にかよふ梅が香」とよみしを、人々奇特のことゝほめはやし、それより奈良屋といはず、十四屋の惣右衛門と呼びしといふが、これも古哥ありと思はる、されど今は不圖思ひ出だされず。何れの時にか、いみじき盗人捕へられて、今や刑場の露と消えなんとするに、役人にむかつて云ふやう、重き罪を犯したる身の、

さら〳〵惜しき命にはあらねど、せめてのこと、辭世を一句殘し侍らんほどに、暫刀を下したまふなといひさま「かゝるときさこそ命のをしからめかねてなき身と思ひ知らずば」と吟せしに、それは太田道灌の歌にあらずやといはれて、左に候ふ、これこそ今生のぬすみをさめに候へといひしとかや。後世の古人に暗合するは、少しも是非すべきことにあらねど、云々は誰の歌なりと知りながらも、その中の名句をぬきとりて、わが物となすか。或は少しく言葉をかへて、新案となす、所謂歌ぬす人といふべきもの、古より頗多きことなり。嘉應の頃源三位頼政が、建春門院北面の歌合の時、關路落葉といふ題に「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白川のせき」とよみて、俊惠法師の許に行きて見せけるに、この歌、秋風が吹くに似て侍れど、必定出でばへすべきうたなりといはれしを信じて、歌合の席に出されけり。さて頼政はその日、俊惠を訪ひて、今日もし負け侍らんには、恨み奉るべし。能因法師が歌の、霧を紅葉にかへたるばかりにてこそ侍れ。心も詞も句がゝりも同物かとぞ覺え侍る、と語りしとやらに今川了俊も記せり。判者は俊成卿なりしが、いよいよ五番の右の歌に、これをよみあげしに、少しの非難を陳べられしかども、遂に勝と判せられたり。頼政の心中いかが有りけん。能因これを聞きて、地下に笑ひしかも知れず。さてその左方の歌は、左衞門督實國卿の「おとは山ぬさとちりかふ紅葉を關もる神やわが物と見る」（つゞく）

蘆の下根

ちかきころは、年のくはゝりたまふしるしにや、物ことおよすけ給ひぬれは、かうやうの事もおほしわきたまふへく、よろつにおとなしく見まゐらせ候ほとに、御覽しとむるふし〲もやと、猥にやまともろこしのふみの內、かたはし見及ひ、聞おほえたる事とも書つけ侍りぬ、

一およそ、人の子の中に師をもて文をまなひ、身をゝさむる道をならはしむるもあれと、女はいとけなきより深窓にやしなはれて、人にまみゆる事もなけれは、おのつから道のをしへもうとく、いく程なからで他の家にゆき、夫に順ふものなれは、親のもとにとゝまり居ることもしはしのうちそかし、萬づに心をそへられんこそいとめてたからめ、

一人は心にて侍る、いかにかたちうつくしく、能世に勝るとも、こゝろ定らす、うつゝともわかぬやうにては、いたづら事にて候、さだかなる心を本とし、假初にも、あだなる事有べからす、かの雨夜の品さだめにも、こゝろをさまりたらん人をこそ家とうじともさためて、誠のよるへともし侍るべけれと、呉々かゝれたれは、只正直に道理をしりたらんより外は、何事か侍るべき、扨萬の事、如何程もやはらかに、なよやかなるかよく侍る事にや、かりそめの言の葉にも、さがなき事をいはず、ものいひすくなくし給ふへし、總して男も、女も、人の心は、外に見え

ぬものにて侍れは、言葉と行ひとにて知らるゝことにて候そや、能々愼み給ふへし、

一女に三從の道あり、いとけなくしては親にしたがひ、人となりては夫に從ひ、老ては子に從ふものなれは、我身をたてぬ事と、いにしへのひぢりたちもの給ひ置れしと承る、他の家を我家とし、夫を天にもたとへ、又、君にもたとへ侍るゆゑに、仰き尊ひてしたかひつかふまつる事女の道也、男は外を勤め、女は内ををさむ、是天地陰陽の自然のみちなり、女はうちの事をつかさとりて、外の事にはいさゝかも預るへからす、内外男女のわかちをつゝしむへし、物毎、ひとり我心の儘にすへからす、一生身を終ふるまて、夫にしたかひ、背くへからす、しかなれと、夫の心をひたすらにとり、うはの空になれ、したしみをもとむへからす、わがみさを正しく、一筋にまことを本とし、違ひ給ふへからす、忠臣は二君につかへす、貞女はふたりの夫にまみへすとかや、女の操をたつるは、忠臣の節を守るに同し、もろこしの曹文叔か妻、令女は父母の命にそむきて耳をきり、王氏か妻はえひす國へとらはれて夫のために命をうしなふ、我朝にもこのたくひ多し、貞心のまもりは女の常なりと、皆人ことにしる所なれとも、身によくなす事はいとやすからぬわさそかし、清少納言か、恥かしき物は、夫のこゝろのうちといへる、誠に夫にむかひて、常にはちおもふ心あらは、おのつから身の勤も、正しくこそ侍らめ、

一舅姑につかふる事、我家に有し時、父母につかふまつるかことし、女はひとたひ人の家に行ては、夫の父母を、我父母とするゆゑに、孝養の道・朝夕にをこたるへからす、こと〱く仰に隨ひて、こゝろさしを盡すへし、

一我里に心をよせて、夫の家を疎略にし給ふへからす、總して家々によりて、その品かはるものなり、かならすしも其家の定めを守りて、背き給ふ事有へからす、我里をのみ引て、夫の家の事をわしさまに思ひ、言葉にも出すは、婦人の道にあらず、又かりそめに人にむかひても、我里の方の事のみ能樣にいふは、かたはら痛く、聞にくきものにて侍るなり、能々心得給ふへし、

一第一嫉妬の心をつゝしみ給ふへし、いにしへ聖の宣ひし、女になゝつのすてらるゝ道のひとつなり、たしなみ給ふへきはこの道なり、されは、ねたみの心より、夫に從ふ道をもうしなひ、閨門の內さわかしく、つひには夫にうとみ果られ、かへりては父母の恥をもあらはす媒となれり、我國にも、皇后を立給ふ外に、女御、更衣のあまたおはします、もろこしの法に、天子は十二人、諸侯は九人、卿大夫は三人、士は二人の婦女を畜とかや、是はいさゝかもいろを好み、艶にひかるゝにはあらす、世繼の多からむためそかし、庶人にいたりてこそ、一夫一妻のものなれとも、子なき時はおもひものとておく事有、誠にひとの妻たらんものは、夫のために女をもとめ、すへて、世繼の絶さらむことをねかふこ

そ道ならめ、我一人の愛をもとめんため、却て他をそしりねたむは、淺ましく耻かしき事ならすや、

一酒もり遊ひやうの事は、人のなへて好む事なれとも、あまり酒にふけり遊ひに長するは、男すらよからぬ事にて侍るなり、まして、女の身には一入に愼み給ふへし、これよりして志も、つとむるわざもをこたりて、いつとなく禮もみだやるゝ者にて候、たかきもいやしきも、上下の分際はわかち有へき事に侍る、かつ夫のため、しうと、しうとめの御遊ひならは、かゝるけうも催ふされんも、折にふれてはいやしむへきにはあらす、あしからぬほとに、自らもうちまじりて御心を慰め給ふへし、わきて今時、世にもて遊ひ侍る嶋原やうのばさらなるあそび、返くゝこゝろにとめて見給へからす、かゝるものには、人の心をかたふけうばはるゝ事にて侍るなり、

一人を召つかはれんには、老たるをあはれみ、幼きをなつけ、よろつ仁愛の心を本とし給ふへし、いかに性質賢き才智有とも、口さがなく、人をあざむき誹るものを、ちかつけ給ふへからす、かゝるものはかならずしも誠すくなく、言葉かしまし、心はしたなるものなり、我こそあらめと思ふよりして、友垣の變りあしく主君の事も我心にかなはざればそしりなし、心にあふ時は色めかしく馴したしむものなり、又、うまれつき鈍くして、心さしすなほなるものの有は、情をか

けて身のたすけともなし給へ、才能はなくとも、かゝるものは誠深く、主君の仰をまもるもの也、其外は色このめる女、盗心あるもの、しうち事するもの、これらの類はあながちに召つかひ給ふへからす、後のわざはひとなるものなり、何につけても心短きはよからぬものにて侍る、假令心にさはる事ありとも、いろめき、言葉に顯はしていかり給ふ可らず、女のはらたちたる顔はかたちの勝れたるも、いと見にくきものにて候、朝夕つかへ侍る者迄も恐れくるしみて、よそまで名のたつ端にて侍るなり、かの庭の訓とかやいへる文に、只、御身ちかく召仕はるゝ人のみ聞て候はん事が、世に漏聞へ候はんすると思し召候へ、よそにとはきひとのものを申沙汰する事は候はぬ事にて候と、四條の局の書給ひしは、けにさる事とこそ覺へ侍れ、

一いにしへ、婦人、子を娠ては朝夕の起伏も、身もちみだりならす、假初にも正しきもの見聞て、露も邪なる事にふれざれば、うめる子も容儀正しく、才ひとにまさると也、扨おち、乳母のかしづきをえらひ、その人からをもちゆるといへり、から國の孟母は、三たひそのとなりを擇ひて家をうつせり、又、周の太任は王季につかへ給ひて、正しきさたかなる德のましま す故、閨室のうちををさめ、君のたすけとなり給へり、御子をはらみ給ひても、周の世さかむにて、めでたくおさまり、八百とせ迄傳り侍るとかや、是すゑの世までも、婦女の鏡として、もろこし

の文にも見へたり、
おもひ出る儘に、かりの玉つさかきつらね、
あしのしたねの、長々しくつゝけ侍りぬ、い
とをこがまし、かきぬ事こそおほく侍らめ、
かきつむる世々のふることとあふきみよ
　　そふる言葉はなにならすとも
かのとの丑の歳う月中旬
按に辛丑年は享保六年にあたるへし然ら
は婉子の年六十一歳なるへしと思ひ侍る
はあらしや
戊辰葉月望はかり
竹屋清孝

藻鹽草

口に言ふは易く、身に行ふは難し。世人庭訓の必要を説けども、之を實際に施す者は甚鮮かるべし。藤堂嵐子は伊賀の人なり。仝族四世新七郎良族と偕老の契を結びしも、その甲斐なく、不幸にして夫まづあの世の人となりぬ。嵐子の心中おもひやるべし。かくてそれよりは、心を兒女の教育に專にせしに、その方甚宜しきを得しかば、長女須磨子は、世の賢夫人と稱へられ、その弟良躬は勢伊兩國の武士の手本なるべきよし言ひはやされしといふ。享保の末の頃、いとし子須磨女のために記されしものは、こゝに出せる藻塩草なり。嵐子が才高く德盛なりしことは、安濃津の領主高朗君が伊賀に行きし時、この里に名ある紅葉の有りと聞く、といへる誹

句を與へられしにても知るべく、その學問の深かりしことは、藻鹽草の序文の筆力にて確むるを得べし、素より二百餘年前に在りての庭訓なれば、今日にとりては、如何はしきことも有るべけれど、全書四十餘か條は、己まづ之を行ひ、さて後その娘に書き遺しゝものなれバ、漫に空論をならべて、耳目を驚かすとは同日にいふべくもあらず。文章はつとめて平易にして俗に近くせりと雖、字々みなその誠心のあつまれるものなれば、大方の婦人のためにも良藥なること疑なし。請ふ世の母者人姬御前たち、一たび之を甞め味ひたまへ

柳の舍　しるす

人の親のこゝろはやみにあらねども子をおもふみちにまよひぬるかな、とはいにしへのかしこき人も、このはだしにさへられし言の葉なるべし、やけ野のきゞすの子をかなしめるは、心あさき人よりも猶まされるにや、人は只子をいつくしみあはれむ心の深さは、たかきいやしきむかし今もかはらずと見ゆれど、能くをしへそだつる事のかたきにやあらん、さればをさなきよりひとゝなるにおよふまで、親の心いつくしみは只よきが上にもよかれとのみおもふにあり、しかはいへど我身にさへつたなきあけくれなれば、よくをしへさとす事のかたきわざなるをいかゞせん、されども四そぢのとし月、人の上にもわが上にも見聞くことのよしあし、若き時の心とはものゝさとしあきらめもげには年へにけるしるしとおもひしることも多

ければ、そこはかとなくおもふことを筆に殘して、我なき世までも、かげにそふこゝろともしは草なり

子を思ふこゝろのやみはくらけれどみかゝは玉の光をや見ん

一大極無極のことわりは、女のあきらめしるべきにもあらず、あめつちひらけ人さだまりて、男女ならびそなはり、天地人三才の名あり。されば、人は萬物の長にして、天にしたかひ地にのつとり、直なる道をおこなふ、かゝる理を生れながらにしてしるを聖人と申し、學び知るを賢人と申すとやらん、をとこのすなる學問といふこと、女もすべき道なれど、我朝の風俗いろはがなにさへつたなきのみこそなげかしけれ、唐のふみの深きことはしらねど、やまと文字ぞよみやすく、列女傳女四書等のかなふみにても見明らめ過し、世のよき女中のためしをつねに心にかくへきなり、

一男は外をつかさどるとて、四民おの〳〵その家業あり、をうなはたかきもいやしきも、そとの事にはあつかるべからず、たゞ其の内をつかさどる筈の身なれば、夫の家法にしたかひて、能く其の内を治めつゝしみ守りて、身をゝふるまで、いさぎよき心ばせ誠あるべし、

一よからぬ女のくせに、夫のものうちいひたるに、ことば多くうちこたへ、もし夫の言葉にとりつかへたることあれば、こは〳〵敗いひあらがひ、わがきげんの向きたる時に、夫のきげんをもか

へり見ず、さば〳〵しくざれ笑ひ、わが心おもむく時に、夫のものいふにも、返事ぶせうにかはくせわしく、いか〳〵敷いぶりを出す事、みな下ざまのいやしき類にて、よき人のあるべき事にはあらねど、世人多くは妹背の間、はじめのほどはつゝしめども、月日にそへ心安く成ほどに大かた才發に見ゆる人のうへにも、此たぐひなきにしもあらず、つねにつゝしみ心に深くおもふべし、

一つねの身もちは、なにとなく奇麗にあるべし、化粧髪ゆひ、袖のおり、衣類のしたて、帯のむすびもはやり風とて身に似合はぬことをなすべからず、何事も其身相應にかつかうよき様がよし、もし夫のものずきにて好める事などは、大かたは心にまかすべし、町風てかけものなどは、人にかはり目立ちたる風もあるわざなれど、よき人の妻子として、目たちたる風俗は、いやしきわざなり、

嫗物語

井原太郎

禽獣は父をしらずして、母をしるといへること、儀禮に書けり、其の内にも獍といふけだものは、父を食し、梟といふ鳥は、生れて百日すぎ母をくらひ殺す、其の鳥をにくみて、五月五日菖蒲いはふおりふしは、梟を羹にして子たる者に、くはしむること、もろこしの法なりとぞ、又、鳩に三枝の禮ありとて、親のとまる木の三枝下におのれ座をしめてうやまうとなり、鴉はすくれて慈鳥と

て子を思ふ鳥にて、大せつにもとめしゑどきをもはき出して、子をやしなふと見えたり、夜の鶴の子の思ふ聲、池の鴛の雄をしたふを見るにつけても、人として孝慈なく、夫婦の倫をみだりかはしくする事は、鳥にだにもしかざるものといふべきなり、宋朝のむかし、程明道、程伊川といふはらから有り、是を二程となづく、その母二人のいとけなき時、衣食はしいまゝなればいましめ、奴をいかり罵れる事あれバいましめ、道にてもし行きたふるれは、心しづかならむ、かくあらむやといましむ、人の親の愛におぼれて、子のあしきもよしとのみ見なすは心のやみなり、惣じて人の子のあしくなるは、父母のあやまちなり、母、子のあしきを父に知らするものあらバ、つよく折檻して、からき目やみんと悪事をかくし、父につげざるがゆゑに、おのづから子のふるまひ放逸になれり、しかるを、程母は二程のあしきことあれば、父の大中につげて行義をなほさしめけり、父母の恩の品替りたるを、夢窓國師、かくぞ詠ぜられける

父はうち母はいだきてあはれめばかはることゝろと子やおもふらむ

さて、程子を母よく人となして、周茂叔といふ大儒の弟子になしてまなばしめ給ふ、この故に孟子といふたつとき人の後、千五百年儒道たえたるを二程兄弟のつぎ傳へられしも、母のそだてやうよろしければなり、

楚莊王獵をのみたしみ、政事をおこたり、樊姫といふ寵愛の妾ありて、嘗て魚鳥をくらはず、おの

づから獵をやめられたり、齊桓公音樂をこのみて、是もまつりことにおこたり給ふ、衛姫といふ妾ありて、是も音樂を嫌ひて耳をだにかたぶけず、さりしゆゑ遂に音樂をやめられにき、總てやことなき人に仕へまつるものは、朝夕にかやうの心つかひあるべし、

如何なる人にや、姓名はしらず、むかし、寵愛盡きて夫に去られける女あり、家を追出さるゝ時しも、身をしる雨のはれまなく、いとゞ降そゝぎさなきだに分袂の涙袖にあまりて、伊勢をの蜑の鹽やき、衣ほす隙だにもあらぬ身のせんかたなげに見えければ夫もさすが岩木ならねば、しばし雨をはらし、風をしづめてされよなどいひ侍りければ、

女

ふらばふれふらずはふらじふらずともとてもか
わける袖ならばこそ

夫、此歌をみて、たちまち心とけ、雪に湯するがごとく、袂をひかへとゞめ、ふかく末かけて、松山のわだ波たてじと、神かけてゆふだすき、むすびとゝめしえにしの程、老を偕にして、松蘿の契淺からざりしとぞ、唐にもかゝるためしはありそ海、はまの砂のかずかずに、よむことの葉はつくらめや、

周才美が婦、才德すぐれけるが、才美、家を讓り、世帶を渡さむとて、桝を二つとり出し、此小さき桝にては、人にわたし、大なる桝にては、我とりをさむべしと、いと叮嚀に教へければ、よめうけがはずして申けるやう、さやうにもちがたき世帶あ

らば、我力におよぶべからず、暇給はりて家にかへらむとてふ、才美その意趣をとへば婦こたへていふ、翁の兩桝をつかひたまふところ、天道にそむきぬれば、かならず天の責を受けて、此家やぶるゝのみにあらず、子孫までもその報おそろしく侍れば、かく申なりといふ、才美驚きはぢて、左あらバ、その方の心にまかせて、向後兩桝をやぶりすつべしといふ、婦こたへて兩桝をつかひたまふ年數はいくばくぞやといふ、二十余年に及べりと答ふ、よめ申けるは、今より廿余年の間ちいさき桝にてとり、大なる桝にて出し、今までの科をつくのひてのち、桝壹つにしたまはゞ、とゞまりて家をうけとるべしといふ、才美悔悟りて、ともかくも汝がさいばんにまかすとて、家をわたしければ、婦うけとりて、廉直に家を治めぬれば、其家日々に榮ゑ、うまるゝ子二人まで少年にて、及第して高官にのぼりけり、

左の一篇は、本誌にもしば〳〵掲げたる明君上杉治憲公が勝熙君の妾お國の方のこはるゝまゝに、平常の心得にもとてかいしるして與へられたるものなり、本書南亭餘韻といへる寫本のうちより抄出したれは、まゝ誤字とおぼしきがありて讀みかたき節も多かれど、事のしげさに校合もそこ〳〵にてこゝに載する事とはなしぬ、見ん人心してよ、

婦行俚解

後漢之代、扶風郡といへる在所に、斑彪といへる人あり、其の女に、名は照字は惠班といへる烈女あり、同在所の曹世叔といへる者の妻となり、博學宏才あるをんななり、夫世叔早く卒して、寡婦となりて後、節行法度有之、兄の班固といへるは、古今に名高き文人、漢書といへる書を著せしに、八表、及天文志は成就せすして卒せしに、後漢の和帝と申し天子、此曹昭に詔して東觀の藏書閣といへる御殿にて、兄班固か書殘せし漢書を書繼せ給ひ、成就せし程の學才有之女なり帝しば〳〵後宮に召て、皇后はしめ、諸貴人へ物敎させ給ひ、號して曹大家といひしなり、此曹大家のおもふに、子たるもの男子は流石に男子たけ、自身より謀りて物學をし、相應の心懸もすへけれど、女子は愚にて物學もせで、うかとして過、往々人に嫁して後婦の禮をも聞かす、不法なる事ありては、一家のはぢを取る事あらんとて、女誡とてをんなの戒となるへき事を、七章書つゝりて與しなり、今爰に和解するは其七章の內、第四章にて婦行といへる章なり、淸閑、貞靜、守節、整齊、行己、有恥、動靜、有法、是謂婦德、淸はきよしと訓して、濁のうらなり、閑はしつかと訓す、おなし靜なる內に、此閑の字はひまな心にて劇のうらなり、貞ハ正しく事のかはらぬ事にて、松の常盤に色かへぬを、貞松といふ、操がかはらぬを貞女といふ心なり、靜もしづかと訓して、動のうらなり、節も元竹のふしの事をいふ、ふしはよい程にあつて、しかも賢實なる物ゆゑ、それから取り

て、萬の事の上に程合ある、其能い程の分を取り失はぬを節を守といふ、整齊はとゝのへひとしと訓して、物のしかと能揃ひて、とり〴〵になき事なり、行己とは今日我身の上に行ひあせる事をいふ、有耻とは非義なる事はすましと云立功の有る事、動靜とは事をなしはたらく事、靜は事無く只居る時なり、有法は規矩に叶ひをるをいふ、此一躰の心は、女は女の所行に四ヶ條あり其第一を婦德といふ、德は持方なり、第二を婦言と云、言は言語なり、第三を婦容と云、容は容貌なり、第四を婦功と云ふ、功は仕事なり、此四ッは禮記に出たり、此條は婦の所行の第一條なり、扨婦の持方といふは才智明らかにて、人に勝れたる斗にては無く、第一心の濁らす、常に淸らかにして、忘念邪欲なければ、自然と心もいそかしからす、暇あつて靜に正しく、其の操はいつ迄も替らす、物事に其程〳〵の分をうしなはぬ樣に取守り、はつきりとしてふそろひある事無く今日身の行ひ道に違ひ、理に背けることあつて人に指はさゝれぬかと、常に立功して立居振舞もしとやかに、法式に違はぬ、是を婦の持方とする事にて、是を婦德と云、

擇辭而說不道惡語是然後言不厭於人是謂婦言

擇はえらふと訓して、物を撰分る事なり、辭ハ言葉にて、口に物云ふ、其詞遣ひなり、說も道も云出す事なり、惡語はあら〳〵しく、勵く罵詘りなとするを云、時は其いふへき時節あり、不厭といふは、辨舌さはやかに、物いふをよしとするにあらす、是は云へきことか、云ましき事かと、能く

能く撰考へて出るまかせにいはす、其いふふりも女相應にしとやかにしほらしく口上を伸、むさとしたるわらけなき事を云ましきなり、其上女は口やかましき物故、それを愼みて云へき時節に、其云べき事をしほらしく、しとやかに云出せは、人の聞ても耳にも立す、誰が聞ても實直と聞受安く、嫌はるゝ事なし、是を婦の口上ふりとするそとて、是を婦言といへり、

盥浣塵穢服飾鮮潔沐浴以時身不垢辱是謂婦容盥はもと盃に水を入て手を洗ふ事をいふ、夫ゆゑ此字をたらひと訓して、すへて物を洗ひ淨るを盥といふなり、浣も洗ふことにて、衣服なと垢つきたるを濯き洗ふをいふあり、塵の字も穢るゝと訓す、服は身に衣る衣服なり、飾はかさりなり、衣服は一身をとりつくろひ、文摸樣を分つもの故、飾の字を熟して、服飾といひたるなり、鮮はあさらけきと訓して、潔はいさぎよしと訓す、二字にてさつはりとしたる心なり、沐は髮を洗ふ事、浴は湯を遣ふ事なり、以時の時は、前の時有ての時の字と二ッにて、髮洗ひ、湯洗ひ、すべて其程時節の事、垢はあかと訓す、辱ははづかしと訓す、爰にては見苦しといふ程の事なり、是は婦の所行第三ヶ條にて、一躰の心は、まづ女の容儀と云は、唯顏はせの色つや麗しきのみにあらず、常によごれたるむさき事など身につけず、よく洗ひ淨めて、着服なども見事榮燿を好にはあらねど、さつぱりとしてトたらくなる顏をあさす、かみあらひ、湯洗ひも、ぶしよふに無く、それと

てもまた、奇麗好き過て、分もなく洗ひみがく事にはあらす、其程〲に洗ふへき、時節刻限に洗沐して、一身の垢つき、見苦しからぬ様にたしなむこそ、女の客儀とはするそとて、是を婦容とは云なり、

専心紡績不好戯笑潔齊酒食以奉賓客是謂婦功専はもつはらと訓して、一圖に其事に心を寄するなり、紡は糸をつむく事、績は苧をうむ事にて、爰は紡績の二字にて、都て女の業とする事にて、織縫の事まて籠ていふなり、戯はたはむれと訓して、笑はわらふと訓す、うつけたはむれ狂ふをいふ、潔はいさきよしと訓し、齊は熟成なりとてしたゝむる心、酒食は飲もの喰ものなり、賓客はまろうとなり、是は婦の四ヶ條にて、一躰の心は、

先女の仕事は、唯其業の上手に工みある計りにても無く、女はうみつむき糸織の事、第一の業なれは、是を一圖に心に懸て、他念なく取懸り、平常うつけたはむれ、大笑なとの類、したらくなる事をこのます、愼み深く、前三ヶ條を守り、扨飲物喰物は女の手に懸てしたゝめとゝのふる物ゆゑ、隨分いさきよくしたゝめ、夫の客有る時は、如才なくまめやかに世話するをこそ、婦の功とはする事そとて、是を婦功といふと云り、

偖いまた年若におれと、平常の受用にも成へき事を需られたる事感し入ル事なり、夫に付て、莅大夫の書贈しは曹大家の女の誡の内の語にて、婦人の受用にハ肝要なる文なり、されと其語は分りかたき者故、あらく〲講説するとも、一席の談に記

臆もあるましと、猶解し易からんやうに、詞の鄙俚をいとはす、和解せしなり、此文にて自己の受用は足りぬる事なれと、叙に氣附し事書附進るなり、

其事は子供衆多く、段々成長致さるゝなれは、敎育の事追々心を用ゐらるへき事なり、凡人の父母として、子を慈愛するは齊しけれと、父は尊嚴にして、母は卑柔也、尊嚴は敬を生して、其敎立易く、卑柔は親み易くして、其誡め立かたし、夫故に、我しらぬうちに父の敎を、母の愛もて妨をなす事、世の常態なり、第一女たるものゝ心得へき事なり、大室先生子を敎ふるに、母を敎ふるに如すと申されしなり、昔より賢人、君子世に名望高き人の母は、必賢母烈女なり、然は敎育は尤以緊要なる事そかし、其事は一禿筆のくつすへきものにもあらす、諸の書にまゝのせあれは、往々近慶はじめ、心ある者共に問尋、讀せ説せて、聞學はれよ唯人の母として慈愛にながれ、姑息に安んしやゝもすれは、父の敎の妨をなすものそと、是のみ常に心懸て、恐れ愼み、往々子供衆の成立を樂しまれよかしとおもふなり、

あらひはり

第三回

笠雪子

太田家にてお松は下女中の年長なる上に、永く勤むる功勞もあれば、いろ〳〵の事其手ぎりに行ひ思ふやうになしけるが、さりとて誰一人これを咎むるものなし。お花度々お松につれなくされ、左はどまで言はずともと思ふ小言も、風に柳のやさしくうけ、この身に足らぬ處あればと思ひなほしてたちはたらくにぞ、流石のお松も餘り強く當らずなりぬ。これもお花が天禀の一德にぞある。

神は正直の首に宿るとかや。お花眞心を盡して仕へしより、殊の外奥樣の御意にかなひ、何くれとなくお花に御用をいひつけられ、時にはお松の爲すべきこともお花の爲せしことありけり。小雨ふる夜の御寢物語に奥樣お花をほめたゝへられ、當初田舍育ちの用にたつまじと思ひしに、事に慣るれば何も氣をはたらかして親切になし、まして小間使などに有勝の饒舌ならねば、今は一日も花なくては妾も事かぐこと多かり、唯懷春なる上に容姿もよろしければ、これのみが氣づかはし、左は思召さずやとあるに、殿樣もさなりとの御應荅。次部屋に寢ねたるお花は如何なる夢をや見るならん。

人の心は其面の如くそれ〴〵に異り、又其樣は外部より見えぬものなれば、人に交

るにもよく〳〵注意すべし。さてもお松は夜のもの被きつゝ、さま〴〵の事を思ひ出して我身にて我身を苦しめ、眠らんとすれども眠られず。一時すぎ二時となり上野の鐘の音の枕に響くほどに、目はあか〳〵に、冴えわたりたり。そもやお花この御屋敷に來てよりもはや一年。はじめは田舍者の何も知らぬを、おのれ〴〵に敎へてあれだけのものとなし、何處に出しても耻かしからぬ小間使とおしけり。奥樣の御意にかなひたるも、みなおのれゆゑなり。其恩を恩と思はず、時にはおのれを下に見るやうなることあるは何事ぞ。度々小言いへばいつも笑顔に紛らして何とも思はぬ樣なり。能なし猫かと思へバ左樣でもなし。御小間使は始終奥の御用をのみなせばひとなき處にて奥樣になり、殿樣になり、この身他人の事など如何樣に申しあげやうとも勝手次第。奥樣は御人よしにて、人の言葉にはよく乗らせらるれば、御氣に入りたるお花がいふことを、一も二もなく眞實とおぼしめし、おのれを次第に疎んぜられんには一大事。昨日もお花奥よりかけ來り書生の松山さんに何か私語きて、笑ひ、さておのれを見てすましたる仕打など合點ゆかず。憎らしのお花よと疑心いよ〳〵暗鬼を生じ、彼鐵棒にてお花をしたゝかに打ちたらんには、心地よかる

べしと、いともあさはかなることを思ひつゞける折柄、臺所をかけまはる鼠のいと喧しければ、そを追はんとて起上れば、お花不圖目を醒して何でござりますかといふ。お松答へず、何でござりますかと、又いへば、あなたにはいひませぬ。お花これはよしなきことと尋ねてけりと思ふほどに、おさんは熟睡の餘りに枕はづして、あられもなき寢言を口走りぬ。

第四回

一日小田原よりお花の親類なる男、御屋敷に來てお花への談話に、お前の父親先頃引網に出でられしに、不圖した事より脚に大疵を受けて大に惱み居らるれば、御屋敷の御都合よろしければ、お前しばらく介抱に宿に下りてもらひたし。實は唯今迎ひに參りたり、此儀御上に申し上げられよといふに、お花意外の事に驚きぬ。かくてあるべきにあらざれば委細の事をお松に話して、さて奥樣にも事の由を申しあげて、御暇を乞へば、さうした模樣あれば早く行くがよしとの御言葉に、御心付の金子百疋を添へられ、お前居なければ、爰許にても困れば、親の疵の模樣次第にては一日にても早く歸るべしとの御意に、お花淚に咽べば、お前取越苦勞は身の毒なり。心

配せずとも早く行くがよし。殿様には後にて左様申し上ぐべければ。お花しばらくは逗留する心組なれば、着換三四枚を風呂敷に包みて、これ持ちて行きてよと男に渡し、お松をはじめ松山などへも、それ〴〵に暇乞ひして立ち出で、新橋に到りしが清助といふは其身を御屋敷に世話せし男なれば、其家に立ちよりてかくとつげけり。

お花遅くなりましたと家にかけ入り、阿爺御塩梅は如何と直ちに枕邊にすりよりいたはれば、父は嬉氣にお花を見て、能く來て呉れた。母は一臂の力を得て喜ぶこと一方ならず、親類の男にも厚く禮を述べぬ。これよりお花は父の側にのみ居て、晝夜ともなく看護に力を盡し、繃帶の巻きやう、石炭酸水にての洗ひやうなど醫師に習ひてよく覺え、日々其手にてなせしに其効顯れ、日數を經るまゝに漸く歩行するやうになりたれば、一家はじめて愁眉を開きぬ。されば今まで取り紛れて、それに及ばざりしお花の言語動作の優美に兩親深く意を注ぎ、何時の間にかくなりたるかと驚くばかり、嬉しさはやま〳〵なり。殊に母親は女氣の何事にも些細なるところまで尋ぬればお花は御屋敷にての模様を委しく話し、唯お松に時々心配することあ

りといへば、母親はそれほどの事は勤する身に有勝なれば、辛抱するがよしと戒むるにぞ、妾も其氣でござりますとお花の返答に母親安堵し、さてお前が毎月の仕送りに家内の生計も大に都合よくなりたれバ、これが第一に禮を言はねばならず。それに此度は奥樣より、別に御金を頂戴して來たとは、願ふてもなきこと丶嬉しがればお花は子に禮をいふ親がありますものかと立ちあがり、まだ御目にかけますものがござりますと、風呂敷包みの中より、小袖繻絆帶上の數々を出して見せ、それもこれも奥樣よりいたゞき又これは、自分にて求めしなど、一々にいひきかすれバ、兩親の喜悦例へんに物なし、弟は側よりお花をつく／＼ながめて、姉樣の顏丸くなりたりといへば、それは食物が違ふゆゑと母親笑ひぬ。これならばいつにても立派な嫁入りが出來ると父親又笑ひぬ、笑ふ門には福來るあはれ賤が伏屋に春は立ちけり。

お花近所の家をそれ／＼に音づれて、一別以來の無音をわび、かつは親の病中世話になりし禮を述ぶれば、何處よりも快く返答し、先づ御茶一杯とすゝめて、その奇麗になりしことをほめ東京の有樣を聞くもの多かり。わけて朋輩ありし娘等は、何となくなづかしく、お花の側によりて、流行の髮の結ひざま、衣裳の品柄など彼是尋

ね、又共に游びし折の事を話して興に入りぬ。或日お花人に誘はれて芝居見物に行きしが、若いものども早くも之を見つけて、さてこそ高尾は野州塩原より出でたるなれ。

お花家に歸りてより二週間許になれバ、今はとて兩親に暇乞して立ちいづれば、兩親は後見送りて何も勤が大事大事。

文林

海邊鶴　　東久世通禧

浪風もなこの浦はに君か代の
　千代をことほくたつかねそする

竹間鶯　　黒田清綱

うくひすのはつねのもりとなりにけり
　我山かけのたけのたけの一むら

初春霞　　岩下方平

鶯もまた春そとはしらぬまに
　山は霞のころもきにけり

原元辰母　　師岡正胤

かへりみすわたの大野をわけ行けと
　をしへてちりし原のははそは

大石良雄　　淺野　忠

石といへは瓦におなしものなるを
君か光は玉にまされり

同　　三上　一彥

よろしくもひそめてけりな梓弓
かへすうらみのやたけ心を

同　　矢上浦三郎

家の名の石よりかたきこゝろもて
君かあたをもうちてけるかな

寄老逃懷　　税所　敦子

おい人をめくみますよに逢ひてこそ
なかき命はうれしかりけり

橘逸勢女幼冲　　佐々　豐水

葛の葉のうらみもつゆときえはてし

ちゝの名高くあけにけるかな

忠度卿　　木村　啓

春霞たちかへりつるかひありて
ちとせに匂ふはなのことの葉

明治廿五年一月元旦　　黑田　礒子

こゝそちのむかしも今もかはらぬは
ちよの松がえよろづよのたけ

紫式部　　光岡　正影

言の葉のにはひゆかしき紫も
ふみのはやしに色そひにけり

懷亡友　　花井　魯禪

たらちねの歎は跡に殘りゐて
聞くたひことに袖そぬれける

山路鶯　　彌石　琴子

鶯のこゑをし聞けは行きかひの
山路のうさもうち忘れつゝ

春曙　彌石文子

見渡せは四方の景色もうら〳〵と
かすみこめたるはるの曙

梅咲く家に女書よむ　林甕臣

さ、と打薫る梅が香をかしきに、垣のくづれより見入れたれば、南おもての庇はらひあけて、未通女ふたり、机によりて、もの學ぶさま、あらはに見ゆ。書よむこゑさへ、もの〳〵しう、すぐれたり。庭にさひづる鶯の音は物にもあらず、打けたれつべし。顔はとり〴〵に、いと美しう、額つき眉のわたり、打けぶり、えんに、らうたげなりかし。惓みつるにや、書よみさして、梅の花、見出だして、端ちかう出でゝ、なまめき立てり。ひとりは、姉にや。姿かたち、ねびとゝのひ帶ひきゆへるわたり、ふとやかに、尻もち、いかめしきは、世ごゝろすでに知れるなるべし。今ひとりは、まだ世ごゝろ知りぬべくも、あらず。ふみ學び一すぢに、心おきてたる、けはひして、八丈のきぬに、くれなゐ、ひきしめたるが、ふりも無う打なげたるさまに、しどけなう、ばうぞくたり、ねびたる人よりも、きはことに、色しろう、髪くろし。かをりくる袖のおひ風は、なか〳〵に、梅が香、はづかしかりぬべし。年は、いくつにか。名も、聞かまほし。

をなゆかし　すゞろゆかしな　打かをる
梅のはつ花　鶯のこゑ

雑報

左の一篇は、高等女子師範學校長細川潤次郎君か、過くる頃同校學生に向て演説せられたるものなり女教の上に於て頗適切なり見ん人なおはろかにしそ。

○在家思想

予ハ本日生徒及職員諸氏ニ向ヒテ、一言セント欲スルモノハ、今夕卒業生送別會ノ席上ニ於テスベキモノヽ如クナレドモ此事タル余カ常ニ言ハント欲スル所ニシテ、且又二三ノ教育ニ従事セラルヽ人々ヨリ忠告セラレタルヿモアレバ、卒業生ニ限ラズ一般ノ生徒及職員諸氏ニ向ヒテ、其注意ヲ促サンガ爲別ニ此席ニ於テ一場ノ談話ヲナスヿトナレリ、今諸氏ニ向ヒテ言ハント欲スルモノハ、假ニ之ヲ在家思想ト名ケン、在家思想トハ英語ナレバ、アイヂフ、オフ、ホームトモ譯スベキヤウノモノナレドモ、只是談話ノ一題目タルニ過ギズ、决シテ哲學上ノ理論ニ渉レルガ如キ、高尚ナル意味ヲ含ムモノニアラズ、生徒諸子ニ常ニ注意シテ、力メテ此「ホーム」即家ト曰ヘル思想ヨリ、遠ザカラシメザランヿヲ望ムマデノヿナリ、抑人ハ

群居シテ生活ヲナスベキモノニシテ、決シテ孤立スベキモノニアラズ、人ニ夫婦アッテ親子アリ兄弟アリ、其小團結ヲ名ケテ家ト曰フ、家ノ多ク集マル者ヲ社會ト曰フ、此社會中ノ家ハ要スルニ大同小異ナリ、一家ノ思想ヲ以テ、他ノ千萬家ノ思想ヲ概スベキモノナリサレバ若シ人トシテ「ホーム」即家ノ思想ニ遠ザカランカ、即其人ハ社會ニ遠ザカルモノト云ハザルヲ得ズ、余ノ幼少ナリシトキ亡父ノ誡ニ、『机ノ上ニ書ヲ讀ミナガラ、老タル親ノ庭前ニ草ヲ取ルヲ傍觀スルガ如キ、人情ニ遠キ學者ガ出來テハヨヤル』ト云ハレシヿアリタリ、學問ナドスルモノハ、知識ヲ廣メントスルニ拘ハラズ、普通ノ人事俗務ヲ顧ミザルノ弊アルモノナリ、女子ニシテ學問スルモノモ、次第ニ家事ノ思想ニ遠ザカリ、社會ト相懸隔スルニ至ランヿハ、假令道徳完備ナル教育ヲ施ス𪜈、勢免ルベカラザル所ナルガ如シ、之レ余ガ此點ニ向ヒテ、十分諸子ノ注意ヲ促ガサント欲スル所ナリ、女子師範生徒ノ普通女子ニ於ケル境遇上ノ差異ニ二ツアリ、其一ハ在學中ノ境遇ナリ、師範生徒ノ境遇ハ、大ニ社會一般ノ女子ト異ナルモノアリ、即普通ノ女子ニ在リテハ、假令學校ニ通學スルト雖𪜈、必ズ父兄親戚ノ管督ヲ受ケ、後嫁スルニ及ビテモ、猶其夫及親戚ノ管督ヲ蒙ルヲ以テ、殆ト獨立ノ期アルヿナシ、然ルニ諸子ハ之ト異ナリ、特別ノ希望ヲ有シテ、父兄親族ノ管督ヲ離レ、遠ク故鄕ヲ去リテ此校ニ入ルハ、普通一般ノ女子ト異ナリタル位置ニ立ツモノナリ、

(此事男子ニハ固ヨリ珍シカラズ)獨諸子ノミナラズ、彼ノ養蠶及機業ノ盛ナル地方ニ於テハ、遠國ヨリ之ガ見習トシテ、來リ集ルノ女子モ少カラズト雖ドモ、是レ亦普通ノ事ニアラザルナリ、其二ハ即チ卒業後ノ境遇ナリ、本校ノ生徒ハ獨リ在學中ノミナラズ、卒業ノ後ト雖ドモ、亦普通ノ女子ト大ニ其境遇ヲ異ニスルモノアリ、即卒業ノ後ハ必文部省ヨリ指定セラレタル地方ニ、職ヲ奉ゼザルベカラザルノ義務ヲ有スルコト是ナリ、卒業生中ニハ父兄附添ヒテ赴任スル者モアルベク、又幸ニシテ其故郷ニ赴任スル者モアルベシ、然レドモ是亦一般ノ事ニアラズトセバ、家ヲ離ルヽノ點ニ於テ、毫モ第一ノ境遇ト異同アルコトナシ、其後日好偶ヲ求メテ一家ヲ治ムルニ當リ、茲ニ初メテ「ホーム」即チ家ト關係ヲ有スルニ至ルモノナリ、凡ソ人トシテ全ク「ホーム」即チ家ノ思想ヲ有セザルモノアラザルベキモ以上ノ如キ境遇(二個)ニ在ル間ハ、自ラ此思想ニ遠ザカラザルヲ得ズ、夫レ社會ノ家ノ有樣ハ、決シテ一定セルモノニアラザルハ人ノ知ル所ナリ、然レドモ彼足ヲ知ラズシテ履ヲ造ルモ、猶人ノ足ニ適合スルカ如ク、此千種萬樣ナル家モ、自然其間ニ類似セル所アルヲ以テ、甲家ノ人乙家ニ嫁スルモ、其家政ヲ治ムルニ甚シキ困難ヲ感ゼザルベシ、然ルニ彼所謂書生暮ノ生活ニ慣レタルモノハ、社會一般ノ生活ノ有樣トハ大ニ隔絶スルガ故ニ、是等ノ人ニシテ突然出デヽ一家ノ主婦トナルトキハ、生活法交際法等大ニ從前ト異ナルヲ以テ、其人ノ不幸ハ勿論、其家ノ不幸モ實ニ少

カラザルベシ、此レ予ガ老婆心ヲ以テ、諸子ノ注意ヲ促ガス所以ナリ、

（未完）

●開けたる女　巻煙草くゆらせつゝ、牛肉店より出で來。酔をさへ帶びたるめり。足は千鳥の、跡にはあらで足を學ぶ。口には生覺えの英語を囀るかと見れば、下司どものする鼻歌とかいふものゝ樣に、賛美歌めきたるものを唱ふ。見るにも吐氣は催されぬべし。人は言ふ。「これ開けたる女なりと」吾人は思ふ。」これ女には非るなり」と、

●天下の美女　とは如何なるものぞ。容貌はともあれかくまれ。家のうちにても立ち働きのいそがはしき爲、体肉かたくて、いとよく肥えて、太々しき手の、朝な夕なの庖厨の水づかひの烈しさに、ひゞのきれたるさへあるに、霜やけとかいふものにて、甲のあたりの赤く膨れたる、これ豈天下の美女にはあらずや。何となれば、その手のひゞ霜やけは、年老いたる母をして火鉢の前に安坐せしむる徽章なればなり。その固く肥えたる身体は後來の日本を形づくるべき忠烈雄偉の臣民を孕むに足ればなり。

●奇特に見えし少女　雪催せる空の、風さへ渡る冬の夜は、おろし籠めて火鉢を友とせむも、猶寒さには堪へ難かるべし。かゝる折しも、年の頃六十ばかりとも覺しき老女の繿縷をさへ纒ひ兼たるが、とある橋のたもとに坐りて、何とも言の葉はなくて、たゞ頭を下げつゝ、行きかふ人に憐を乞ふ、あはれとは誰か見ざらむ。さるにても、坐前

一厘の錢貨を止めぬてこそあやしけれ。さては誠あはれと思はむ人の無きなめり。いで我こそはおど思ふうち。通り掛りし一人の少女、年は十五六にもやありけむ。身なりさへ賤しからず、紫色の頭巾に面を半包み、使ひの歸さとも覺しくて、片手には灯燈を持ち、片手には服紗包様の物持てるが、立ち止まりて見居る三四人の中より、一人進みいでゝ、紙入やうの物より錢とりいだして、老女に取らせて、心あるさまにうち顧みて、さて足早に行き過ぎぬ。素より縁の者にもあらず、又見えの爲にも非るべし。老女をあはれと見し人にも、今は視線を其方へ轉し、瞻望之を久しうす。少女の姿の見えずなり行くまで、

●雪の朝　夜中過る頃より、風の音おどろ〳〵しう、寒さいと烈しかりしかば、こは何事のおこるにか雪などの降るにもやなど思ひつゝけていねたる朝、あやまたず、都の内は、一面に白銀の世界となり、園の枯木に花さかせたり、さるを、猶をやみなくふりしきれば、心弱き人は門にもえ出ぬなるべし。已強しといふにはあらねど、契りし事ありて、友垣許ものしたり。暫くありて、歸りけるに、そのかへさには、はや街々に人あまた立ち出でゝ、大路の雪除けんといそしめり。そが中に、十二三ばかりの貌いやしからぬ少女の海藻のやうなる衣きたるが、一人の老爺とともに頻りに雪攪くことをつとめたり。こはその父一人が、この寒さに出行かんを見兼てしたがひしなるべし。やがて其の後の方より雪を蹴立てゝ馳せ來る車あ

り。とみれば年の頃十七八と覺しき處女の跡押付けて來りしなり。紫のふくさに書物やうのもの包みて携へたるは、學校に行く道なるべし。おのれ思へるやう、同じく人、同じく處女、されど、或者は親のなりはひを助くるほどの不幸にて、或者は車にのりて學校に通ふばかりの幸福なり。その幸と不幸とは月と鼈とのたがひあれど、その心ばせはいかに、不幸の者かへりて、幸福の者に勝ることはあらぬか。

●廣島婦人會　明治廿一年二月一日、始めて結會せしよりこのかた、毎月第一日曜日をもて會日とさだめ、家政上に必要なる種々の談話をなして一家守成の大要を知らしめ、女禮、茶湯、挿花などを教へて和合一致の美德を養ふをもて本旨とす。會員百五十餘名、みな奢侈を排け、優柔を避けて、世の弊風を矯むることに熱心なるが故に、該會は、日に月に盛大に趨くといふ。

をしへの庭

殘雪

咲く花にまかはんとてや遠山の
木のまに雪のきえのこりつゝ　安藤すゞ子

もえいでし若なの上はきえながら
むら〳〵のこるのべの白雪　高井孟子

うら〳〵と霞こめたる山の端に
またむらきえの雪ぞ殘れる　増山くに子

麓には木のめもはるの色みえて
さすかに殘る峯の白雪　加納山良子

若菜つむのへには春の色みえて
たかねにのこる去年の白雪　廣田とめ子

梓弓春は來ぬれと山里の
木の間の雪は消ぬのこりつゝ　久保田りつ子

天賞堂販賣の金屬諸品就中時計、鎖、指環、婦人用帶留其他都て携帶美術裝飾品に至りては其製作の意匠優美にして技術精巧なりとの好評を賜はり頻りに愛顧を被むり隆盛に赴くを以て猶この好評に背かさらん事を冀ひ即ち昨冬弊堂の店則に基き方今大名の諸君の中に於て意匠家には

（姓名いろは順同字は年長順）

日本美術協會委員主事 獨幹散史 大森惟中

東京彫工會幹事
日本美術協會委員副長 香雪 前田健次郎

東京彫工會幹事 櫻痴居士 福地源一郎

京都美術學校教授
精工社副長 岸光景

日本美術協會々員
東京彫工會幹事
名古屋市工業意匠委囑 蒹軒 鹽田眞

東京彫工會議員
日本美術協會々員 池戸明國

東京美術學校教授
帝室技藝員
日本美術協會委員
東京彫工會金屬部長
臨時全國寶物取調局臨時鑑査掛
正七位 加納夏雄

東京彫工會委員
日本美術協會委員 香川勝廣

東京彫工會々員 川崎利廣

東京美術學校助教授
日本美術協會委員
東京彫工會委員 海野勝珉

彫刻家には

東京彫工會部長、日本美術協會委員 伊藤勝見

東京彫工會部長、日本美術協會委員 池戸民國

（此の外意匠家及彫刻家へ目下照會中の分は承諾を得次第其姓名を追加すへし）

右の人々に請ひて意匠と彫刻の事を依囑し其承諾を得たり此諸君は其學識の該博なる其技藝の高妙なる天下の遍く知る所なり弊堂特別製作の物品は意匠彫刻とも其考案と妙技とも兩なから併せ有するに由り眞に東洋特有美術と稱すべき物品を調進する者なり是れ弊堂か自から喋々自讃するを待たず此高手に成れる物品を一覽あらば意匠の高尙優美にして技術の精巧靈妙なる匣を開けは光彩爛燦として眼を奪ひ心を怡はしめ美術の果して美術たるを感得せらるべし

併せて一言する者は近時世間狡猾の輩ありて往々諸名家の雷名を騙り甚しきは公然その贋銘鏤めたる僞作物品あるを見るに至れり弊堂深く此輩の愛顧の諸君の誤まられ玉はん事を慮り凡そ弊堂調進特別製作品にして名家の手に成れるものの外に其人自手自印の證明書（即ち折紙）を一々に添付すべし又愛顧諸君にして右諸大名家の考案技術を希望し玉ふ事あらば弊堂に一報を賜へ直に堂員を參邸せしめて御注文を縱はしむべし

此餘弊堂販賣の諸品は都て其意匠に就ても彫刻に關しても右諸大名家の指示に由り又は其監督を受て調進するを以て自から大に世間普通の物品に殊なる所あり冀くは愛顧諸紳諸閨秀親しく物品を識鑒おつて陸續調進を命し玉へと謹て奉願候頓首敬白

明治廿五年一月

東京京橋區尾張町二丁目十八番地
電話番號三百三十三

天賞堂

主人 江澤金五郎

精華

明治廿五年
第壹號
紀元節發行

○勅語

○若木の花（新体詩）……阪正臣

○祝辭

●祝辭……子爵 土方久元
●仝……伯爵 東久世通禧
●仝……子爵 岩下方平
●仝……西村茂樹
●仝……寺内正毅
●仝……杉山直矢
●仝……本宿宅命
●仝……武谷水城

○精華

●發行の趣旨
●何をか日本男兒といふ
●美少年

○論説

●對外策之大礎……稻垣滿次郎
●節儉と吝嗇……濱田健次郎
●護國策……卿田兼徳
●多望なる少年……高島平三郎
●最愛なる青年の爲
●精華の發刊に付て……勝浦鞆雄
●我國に萬國博覽會を開設する方案……伊勢本一郎

○史傳

●小楠公

○叢苑

●詩……海鶴仙史
●同……山口岫雲
●同……空齋居士
●同……愛國頑夫
●同……蜻蛉子
●同……久萬直澄
●尙武の歌……菊酒家馨
●謁武田伊賀守之墓……關以雄

○小説

鐵男……江見水蔭

○隨筆

●都兒●弘法も筆の誤●菊御紋章は用ゆべからず●東都の梅花北陸の雪景●梅將に綻はんとす●新桃源●教師に對する無禮者●出來そこなひ●目的を鞏固にせよ●清兵の出征●横議の時世にわらず●商業學校卒業式●對馬の外人探偵

●口畵 楠正行……松本楓湖
●小説插畫……竹内桂舟

（代價壹冊金五錢五厘 全國無遞送料）

發行所 東京麹町區平川町五丁目十六番地 國光社

大取次所 東京 東京堂 東海堂 朝陽堂 共同新聞舗 武藏屋 大阪 岡島支店

國光第三巻第八號

目録

（定價一冊十三錢 全國無遞送料）

○國光

●立志論●朝野忠誠の士に告く

○鏡の影

●贈從一位島津齊彬公畧傳（承前）

○劒の光

●孝明天皇祭日畧說（從三位細川潤次郎）●矯世危言（從三位渡邊國武）●天朝正學（栗田寛）●國我論（二）（本莊太一郎）●北條泰時の大不孝を論して再ひ井上氏の邪說を駁す（岡島安平）

○瓊の德

●詩（正三位子爵佐野常民）●同（簡齋、久万直澄）●同（平松寛三）●同（安田退三）●同（松洞、櫻井義導）●同（永山昇）●歌（從二位伯爵東久世通禧）●同（從三位子爵黑田淸綱）●同（從三位子爵岩下方平）●同（佐々豊水）●同（師岡正胤）●同（池田孫一）●同（松浦辰男）

○心の柱

●島津日新公伊呂波歌の解（承前）（從三位子爵岩下方平）●フリードリヒ大王少年軍人敎育譚（承前）（川上中將寄贈）●少年手藝敎育論（承前）（正六位中川元寄贈）

○國の礎

●地震に就いて（承前）（片岡正占）

○文の園

●明倫館に臨みて一言す（正二位伊達宗城）●石心松操（從二位伯爵東久世通禧）●平山省齋先生墓表（正三位子爵佐野常民）●題王子山稲荷神社揭軸後（朝鮮使者永嘉權在衡）

○筆のすさび

●梅花錄（第一回）日置海鶴

○八洲の護

●軍艦比叡金剛土耳其紀行（承前）

○大和錦

●書經堯典講義（承前）（元田永孚）●留魂錄（承前）（品川子爵寄贈）●兼平遺劔記（林小參寄贈）●尾崎靖傳（東華居士）

○時事

●皇恩可仰●先途可醫●曲說可討●英國ケンブリッチ日本道義會第六回紀事●高知の騷擾●石川の決死隊●富山の毆打●命の安價●葡國將に領地を賣らんとす●春雪霏々たり●豫戒令●二月十五日●兒島公遺跡保存法

○學の海

●神字考（承前）（田中頼庸）

○挿畫（松本楓湖）

女鑑第八號目次

女鑑
愼みてゐ怠りそ
論說
女子の風は茶事の如くなるべし（土子金四郎）女子の本分（椿蓁一郎）
史談
在原業平の妻の傳（井口隆太郎）●松田助八女さつ女の事を記す（竹野節雄）
家政
●育兒小言（七）（承前）（武谷水城）●女禮式（承前）（有住齊）●家內衛生（七）（三笠の舍主人）●茶事（承前）（藤井行麿）
學園
●和歌のしるべ（承前）井口隆太郎●百人一首講義（承前）（同人）
漫錄
●清少納言（承前）小野利三郎●越部の禪尼消息文（井上頼文）●楠公家訓（承前）（綠園主人）●楢の舍歌かたり（承前）富田馬太●初午祭（井上頼文）●嫗物語（井原太郎）●あらかはり（笠雪子）
文林
和歌●東久世通禧●黑田清綱●三上一彥●小池道子●稅所敦子●師岡正胤●佐々豊水●井口つる子●和文　すまの友何たに子
雜報
●うめのたより●かた身せまき女●詞つかひ●みだれ髮●今は昔●後の昔●女たちの言語文ことば
餘芳
●星月夜物語（愛馨散史）
敎の庭
歌題待鶯●廣田さめ子●高井孟子●柚原まさ子●加納由良子●赤座ぎん子●佐々鄰子●大手さよ子●江崎みさ子●安藤すゞ子●師岡千代子●師岡すゞ子●澤田春子●鋼子●江崎まさ子
文題旅なかゝけて雪を見る記●山名ます子●大手小夜子●江崎みさ子
口畵在原業平の卦（松本楓湖）●挿畫あらひはり（小峯邦壽）

社　告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し强て領收證を要せらるゝ方ハ別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書ハ一切受取不申候事

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
全國無遞送料
廣告料五號文字廿三字詰一行十錢

明治廿五年二月十九日印刷
同　年同月二十日出版

東京麴町區平川町五丁目十六番地
發行兼編輯人　西澤之助
同　印刷人　長屋基彦
同　發行所　國光社

（遞信省認可）

（東京國光社印刷部印行）